

●『高校生の古典文法』の内容が、より確実に身に付くことを  
ねらいとした準拠演習ノートです。

●各回見開き2ページで26回分です。

●テキストとの併用によって、学習効果が一層上がります。

## 目次

1	序章	2
	五十音図／文語文の特色・単位・活用	
2	動詞〈1〉	4
	正格活用（四段・上二段・下二段・上一段・下一段）	
3	動詞〈2〉	6
	（正格活用で）誤りやすい行／変格活用（ラ変・ナ変・サ変・カ変）	
4	動詞〈3〉	8
	活用の種類（9種類）	
5	動詞〈4〉	10
	動詞のまとめ	
6	形容詞	12
7	形容動詞	14
8	用言総合	16
	動詞・形容詞・形容動詞	
9	名詞・連体詞・副詞・接続詞・感動詞	18
	活用のない自立語	
10	助動詞〈入門〉	20
	活用・接続	

11	助動詞〈1〉自発・可能・受身・尊敬／使役・尊敬	22
	る・らる／す・さす・しむ	
12	助動詞〈2〉過去／完了／打消	24
	き・けり／つ・ぬ・たり・り／ず	
13	助動詞〈3〉推量	26
	む・むず・らむ・けむ／べし	
14	助動詞〈4〉反実仮想／伝聞推定／推定／打消推量	28
	まし／なり・めり・らし／じ・まじ	
15	助動詞〈5〉断定／希望／比況	30
	なり・たり／まほし・たし／ごとし	
16	助動詞総合	32
17	助詞〈1〉	34
	格助詞・接続助詞	
18	助詞〈2〉	36
	副助詞・係助詞・係り結び	
19	助詞〈3〉	38
	終助詞・間投助詞	
20	助詞総合	40
21	敬語〈1〉	42
22	敬語〈2〉	44
23	敬語総合	46
24	和歌の修辞法	48
25	紛らわしい語の識別〈1〉	50
26	紛らわしい語の識別〈2〉	52
★	助動詞の意味・活用・接続を覚えよう	54
★	用言の活用を覚えよう	56

文語と口語の違い (↓ p. 6～7)  
①かなづかい ②言葉 ③文法

五十音図 (↓ p. 8)

次のア行・ハ行・ヤ行・ワ行は、発音や文字表記が紛らわしいので特に注意しよう。

ア行	あ	い	う	え	お
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ワ行	わ	ゐ	う	ゑ	を

次のザ行とダ行にも注意しよう。

ザ行	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
ダ行	だ	ぢ	づ	で	ど

歴史的かなづかい (↓ p. 8～9)

- ①語頭以外にある「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「ワ・イ・ウ・エ・オ」で読む。
- ②「アウ」「イウ」「エウ」などは、「オー」「ユー」「ヨー」と長音(のはず音)で読む。
- ③「ゐ・ゑ・を」は「イ・エ・オ」で読む。
- ④「む」は「ン」で読むことが多い。
- ⑤「くわ・ぐわ」は「カ・ガ」で読む。
- ⑥「ち・づ」は「ジ・ズ」で読む。

1 活用を身につけるには、五十音図(行と段)を確実に覚えている必要があります。次の空欄に、歴史的かなづかいで平仮名を入れなさい。

濁音 だくおん	清音 せいおん					行 段
	ダ行	ワ行	ヤ行	ハ行	ア行	
						ア段
						イ段
						ウ段
						エ段
						オ段

2 ワ行の歴史的かなづかい「ゐ」「ゑ」を正しく書いてみよう。

ふ 横一列にそろえる

る 三つの谷を明確に

(うすい文字をなぞってみよう)

3 次の語句を現代かなづかいで書き直しなさい。

- ①思ふ ②かうし(格子) ③みづ(水) ④けふ(今日) ⑤ゑむ(笑む)

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

4 次の二文は、テキスト各章のとびらにある『徒然草』の文章の一部です。次の(1)(2)をヒントにして、活用のある自立語、すなわち用言(動詞・形容詞・形容動詞)を、そのまま抜き

○ヒント (↓ p. 8)  
たとえば、動詞は五十音図のどれかの行の、どこかの段に活用する。したがって、五十音図(行と段)を確実に覚えておく必要がある。

2 (↓ p. 8)  
「ゐ」は「為」、「ゑ」は「恵」という漢字を崩したものである。

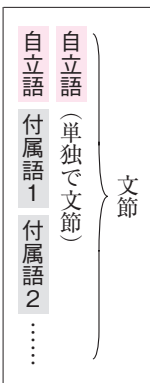
3 (↓ p. 8～9)  
②「アウ→オー」のパターン。

④「ふ」を「ウ」に直し、「エウ→ヨウ」のパターンも用いる。

4 (↓ p. 11～14・20)  
用言＝活用のある自立

文・文節・単語／自立語・付属語 (↓ p. 10～11)

文＝終わりに句点「。」がつけられる、言葉のひとまとまり。  
文節＝意味をこわさない範囲で、文を小さく区切ったもの。  
単語＝文節をさらに分けた、言葉としての最小の単位。  
自立語＝単独で文節になれる、それだけで自立した意味を持つ単語。  
付属語＝単独では文節になれず、自立語の下に付属してはじめて意味をなす単語。



文節の最初には、必ず自立語が一つだけある。

活用 (↓ p. 12～13)

語の形が規則的に変化すること。  
変化する単語を**活用語**という。「ず」「たり」を下に続けて活用させてみる。  
語幹＝活用しても変化しない部分。  
活用語尾＝活用によって変化する部分。

出しなさい。(第一文には3語、第二文には9語ある。)

- (1) 文節が一字アキで示されている。
- (2) 傍線のついた語は、付属語(ただし、これ以外にもあり)である。

かめやまどの 龜山殿の 御池に、 大井川の 水を まかせられむとて、 大井の 土民に 仰せて、 水車を 造らせられけり。  
多くの 銭を 給ひて、 数日に 営み出だして 掛けたりけるに、 おほかた めぐらざりければ、 とかく 直しけれども、 つひに 回らで、 いたづらに 立てりけり。  
\* 「つひに」一語の副詞 \* 「いたづらなり」の連用形

⑩	⑦	④	①
⑪	⑧	⑤	②
⑫	⑨	⑥	③

5 次の動詞を語幹と活用語尾に分けなさい。

- ①移す ( ) ②死ぬ ( )
- ③聞こゆ ( )

6 次の活用表の空欄①～⑥に、六つの活用形の名称を入れなさい。

基本形	語幹	①	②	③	④	⑤	⑥	行
下にくる主な語		ース・ム	ータリ・テ	ー。	ートキ・コト	ード・ドモ	命令の言い切り	

語。  
言い切りの形(終止形)が、  
・動詞：ウ段で終わる(ラ変動詞はイ段)  
・形容詞：「し」で終わる  
・形容動詞：「なり」「たり」で終わる

5 (↓ p. 12～13・20)

6 (↓ p. 20)

パターンを覚える正格活用

① 四段活用(↓ p.22)

ア・イ・ウ・ウ・エ・エ

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
吹く	吹	か	き	く	く	け	け
力行							

② 上二段活用(↓ p.23)

イ・イ・ウ・ウ・ウ・ウ・エ・イ

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
起く	起	き	き	く	く	くれ	きよ
力行							

・現代語との違い  
起きる(イ段+る)→起く(ウ段)  
・紛らわしい上二段  
現代では五段の語≡恨む・恋ふ

③ 下二段活用(↓ p.24)

エ・エ・ウ・ウ・ウ・ウ・エ・エ

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
助く	助	け	け	く	く	くれ	けよ
力行							

・現代語との違い  
燃える(エ段+る)→燃ゆ(ウ段)  
・紛らわしい下二段  
見ゆ(下二段)／見る(上一段)  
聞こゆ(下二段)／聞く(四段)

① 次の動詞の活用表を完成させなさい。(ただし、活用形の欄は活用語尾だけを平仮名で記せばよい。)

活用の種類	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	行
① 段活用	打つ	打							行
② 段活用	恋ふ	恋							行
③ 段活用	越ゆ	越							行
④ 段活用	見る	(見)							行
⑤ 段活用	射る	(射)							行
⑥ 段活用	蹴ける	(蹴)							行
⑦ 段活用	思ふ	思							行
(下に続く主な語)									
	―ズ・ム								
	―タリ・テ								
	―								
	―キ・コト・ド・ドモ								
	(命令)								

○ ヒント  
① (↓ p.22～27)  
② 現代語とは活用の種類が異なる。  
③ 「ふ」は「う」と発音するが、活用表は「ふ」の行で書く。  
④ 「ゆ」は「や・い・ゆ・え・よ」の「ゆ」。

② (↓ p.25)  
「書けず」のように可能の意味をもたせないこと。

○ 四段・上二段・下二段活用の見分け方

(↓ p.25)

語例数の多い動詞は、「ズ」をつけて見分ける。

・吹か+ズ≡吹かず

↓ ア段になる。 四段活用

・起き+ズ≡起きず

↓ イ段になる。 上二段活用

・助け+ズ≡助けず

↓ エ段になる。 下二段活用

④ 上二段活用(↓ p.26)

イ・イ・イ・イ・イ・イ・イ・イ

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
着る	着	き	き	きる	きる	きれ	きよ
力行							

・語例：干る・乾る・射る・鎗る・着る・似る・煮る・見る・居る・率る

「ひいきにみる」と覚える。

⑤ 下二段活用(↓ p.27)

エ・エ・エ・エ・エ・エ・エ・エ

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
蹴る	蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ
力行							

・語例：蹴る  
・紛らわしい下二段  
(未然形)×蹴らナイ ○蹴ズ  
(連用形)×蹴りマス ○蹴タリ

③ 次の現代語(口語)の動詞を古語(文語)に改めなさい。

① 落ちる	( )	② 捨てる	( )	③ 求める	( )
④ 過ぎる	( )	⑤ 下りる	( )	⑥ 流れる	( )
⑦ 攻める	( )	⑧ 答える	( )	⑨ 悔いる	( )

④ 次の空欄に該当する上二段活用の動詞を漢字一字で記入しなさい。

①	ひ	い	き	に	み	る
②	乾	④	③	⑤	⑥	⑦
⑧	⑨	⑩				

⑤ 次の「蹴る」について、古語(文語)としてふさわしくない活用の番号を選び正しく改めなさい。

① 蹴る時	② 蹴らず	③ 蹴よ。
④ 蹴れども	⑤ 蹴りたり	⑥ 蹴る。
番号	番号	

③ (↓ p.23～24・28)

現代語(口語)と古語(文語)の違いに注意。

④ (↓ p.26)

③④はヤ行上二段活用。  
⑨⑩はワ行上二段活用。

⑤ (↓ p.27)

現代語(口語)と違うので注意。

誤りやすい行の動詞 (↓ p. 29)

1 四段活用

ア行・ヤ行・ワ行はない。  
飽く・足る・借る…四段

2 上二段活用

ヤ行：老ゆ・悔ゆ・報ゆ(3語)

3 下二段活用

ア行：得・心得・所得(3語)  
ワ行：植う・飢う・据う(3語)  
・終止形が一字の下二段活用動詞  
得(ア行)・寝(ナ行)・経(ハ行)  
語幹・語尾の区別がなく、終止形が一字である。この3語は覚えておきたい。

4 上二段活用

ヤ行：射る・鏑る(2語)  
ワ行：居る・率る(2語)

覚える変格活用

6 ラ行変格活用 (↓ p. 30)

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
あり	あ	ら	り	り	る	れ	れ

・語例：あり・居り・侍り・いまそ(す)がり  
・ラ行四段活用と終止形が違う。  
・ラ変複合動詞

1 紛らわしいア行・ヤ行・ワ行の動詞を、空欄に示す語数にしたがって答えなさい。

	上二段活用	下二段活用	上二段活用
ア行		(3語)	
ヤ行	(3語)	覚ゆ・越ゆ・絶ゆ・栄ゆ (など多数)	(2語)
ワ行		(3語)	(2語)

2 次の動詞の活用表を完成させなさい。(ただし、活用形の欄は活用語尾だけを平仮名で記せばよい。)

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
① 飢う	飢							行活用
② 悔ゆ	悔							行活用
③ 覚ゆ	覚							行活用
④ 生ふ	生							行活用
⑤ 与ふ	与							行活用
⑥ 鏑る	鏑							行活用
(下に続く主な語)								
	―ズ・ム							
	―タリ・テ							
	―							
	―トキ・コト							
	―ド・ドモ							
	(命令)							

ヒント (↓ p. 29)

紛らわしいので覚えてしまおう。

2 (↓ p. 23 ~ 25・29)

① ア行に活用するのは「得」「心得」「所得」のみ。  
② ③「ゆ」は「や・い・ゆ・え・よ」の「ゆ」。  
④ ⑤「ふ」は「う」と発音するが、活用表は「ふ」の行で書く。  
⑥ ワ行上一段活用の語は「居る」「率る」。

さ + あり ↓ さり / し か + あり ↓ しかり  
かく + あり ↓ かかり

7 ナ行変格活用 (↓ p. 31)

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
死ぬ	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

・語例：死ぬ・往ぬ(去ぬ)  
・四段活用と、連体形と已然形が違う。

8 サ行変格活用 (↓ p. 32)

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	(す)	せ	し	す	する	すれ	せよ

・語例：す・おはす  
・サ行下二段活用と連用形が違う。  
・サ変複合動詞  
名詞 + 旅す・心す・使ひす  
形容詞・形容動詞 + 空しうす・明らかにす  
漢語 + 死す・愛す・論ず  
副詞 + 先んず

9 カ行変格活用 (↓ p. 33)

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
来く	(来)	こ	き	く	くる	くれ	こよ

・語例：来  
・カ変複合動詞  
動詞 + 来 出で来・詣で来・持て来

3 終止形が一字である、次の動詞の活用表を完成させなさい。(ただし、活用形の欄は活用語尾だけを平仮名で記せばよい。)

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
① 得	(得)							行活用
② 寝	(寝)							行活用
③ 経	(経)							行活用

4 次の動詞の活用表を完成させなさい。(ただし、活用形の欄は活用語尾だけを平仮名で記せばよい。)

活用の種類	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
① 変格活用	侍り	侍						
② 変格活用	いまそがり	いまそが						
③ 変格活用	往ぬ	往						
④ 変格活用	おはす	おは						
⑤ 変格活用	論ず	論						
⑥ 変格活用	来く	(来)						
(下に続く主な語)								
	―ズ・ム							
	―タリ・テ							
	―							
	―トキ・コト							
	―ド・ドモ							
	(命令)							

3 (↓ p. 29)

① ② ③ まず「ズ」をつけて未然形を確認し、その行で活用させる。

4 (↓ p. 30 ~ 33)

① ② 終止形に注意する。  
④ ⑤ 連用形に注意する。  
⑤ 複合動詞。「ず」ではあるが、「ザ行変格活用」とはいわない。  
⑥ 命令形は二つ。



活用の種類の見分け方

(1) まず、覚えるべき、数の少ない動詞を見分ける。

〈正格活用〉

④上一段(10語)

その他に「～みる」「～ある」となる語  
後見る・惟みる・鑑みる・顧みる・  
試みる・率ある・用ゐる

⑤下一段(1語)

〈変格活用〉

⑥ラ変(4語)

その他に複合動詞

かかり・さり・しかり

⑦ナ変(2語)

⑧サ変(2語)

その他に複合動詞 ～す・～ず

⑨カ変(1語)

その他に複合動詞 ～来

(2) その他の動詞は、「ス」をつけて見分ける。

ア段の音につけば→①四段活用

イ段の音につけば→②上二段活用

エ段の音につけば→③下二段活用

活用する行の見分け方

活用の種類を答える場合、「○行△段活用」と、最初に活用する行をつける。

①「ス」をつけて未然形を確認する。

②「い」「え」以外になる場合

その行で活用

③「い」「え」となる場合

「い」…ヤ行で活用

「え」…「得」「心得」「所得」はア行で活用

活用

右以外はヤ行で活用

活用させる際は仮名遣いに注意すること。

ア行	あ	い	う	え	お
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ワ行	わ	ゐ	う	ゑ	を

活用形の見分け方

①一つの活用形と一致する

その活用形で確定

②二つの活用形と一致する

下にく語で判断する

1 次の動詞①～⑫の活用表を完成させなさい。(ただし、活用形の欄は活用語尾だけを平板名で記せばよい。)

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
①居り	居							行活用
②死ぬ	死							行活用
③来	(来)							行活用
④す	(す)							行活用
⑤居る	(居)							行活用
⑥蹴る	(蹴)							行活用
⑦取る	取							行活用
⑧報ゆ	報							行活用
⑨食ぶ	食							行活用
⑩念ず	念							行活用
⑪試みる	試							行活用
⑫恨む	恨							行活用
下に続く主な語		ス・ム	タリ・テ	。	トキ・コト	ト・ドモ	(命令)	

○ヒント

① p.22～33

⑩⑪いずれも複合動詞。

2 次の各文中の傍線部の動詞について活用の種類と活用形を答えなさい。

①まことにさることやは侍る。  
あるのでしょうか

②をとこ、とどむるよしなし。率て出でて去ぬ。  
(女を)ひきとどめる方法 引き連れて

③夏果てて秋の来るにはあらず。

④見捨て奉りてまかる空よりも落ちぬべき心地する。  
(ような形で)帰って行く しまいそうな

⑤薪の中に、赤き丹着き、箔など所々に見ゆる木、あひまじはりけるを尋ねれば…  
赤い塗料が付き、金箔などが(は)けてしまった

チ	ソ	ス	サ	ケ	キ	オ	ウ	ア
活用	活用	活用	活用	活用	活用	活用	活用	活用
形	形	形	形	形	形	形	形	形
ツ	タ	セ	シ	コ	ク	カ	エ	イ
活用	活用	活用	活用	活用	活用	活用	活用	活用
形	形	形	形	形	形	形	形	形

① p.22～33

⑦は複合動詞「さ+あり」。

②ウ・オは「ズ」をつける。①は終止形「率」。

③キは「ズ」をつける。

④は終止形「見捨つ」。

⑤は終止形「落ちぬ」。

⑥は終止形「見捨つ」。

⑦は終止形「見捨つ」。

⑧は終止形「見捨つ」。

⑨は終止形「見捨つ」。

⑩は終止形「見捨つ」。

⑪は終止形「見捨つ」。

⑫は終止形「見捨つ」。

⑬は終止形「見捨つ」。

⑭は終止形「見捨つ」。

⑮は終止形「見捨つ」。

⑯は終止形「見捨つ」。

⑰は終止形「見捨つ」。

⑱は終止形「見捨つ」。

⑲は終止形「見捨つ」。

⑳は終止形「見捨つ」。

㉑は終止形「見捨つ」。

㉒は終止形「見捨つ」。

㉓は終止形「見捨つ」。

㉔は終止形「見捨つ」。

㉕は終止形「見捨つ」。

㉖は終止形「見捨つ」。

㉗は終止形「見捨つ」。

㉘は終止形「見捨つ」。

㉙は終止形「見捨つ」。

㉚は終止形「見捨つ」。

㉛は終止形「見捨つ」。

㉜は終止形「見捨つ」。

㉝は終止形「見捨つ」。

㉞は終止形「見捨つ」。

㉟は終止形「見捨つ」。

㊱は終止形「見捨つ」。

㊲は終止形「見捨つ」。

㊳は終止形「見捨つ」。

㊴は終止形「見捨つ」。

㊵は終止形「見捨つ」。

㊶は終止形「見捨つ」。

㊷は終止形「見捨つ」。

㊸は終止形「見捨つ」。

㊹は終止形「見捨つ」。

㊺は終止形「見捨つ」。

㊻は終止形「見捨つ」。

㊼は終止形「見捨つ」。

㊽は終止形「見捨つ」。

㊾は終止形「見捨つ」。

㊿は終止形「見捨つ」。

注意すべき動詞 (↓ p. 29)

1 四段活用動詞

飽く(カ行)・足る・借る(ラ行)  
…上二段ではない

2 上二段活用動詞

恨む(マ行)・恋ふ(ハ行)…四段ではない  
老ゆ・悔ゆ・報ゆ(ヤ行)…3語

3 下二段活用動詞

得・心得・所得(ア行)…3語  
混ず(サ行)…1語  
得(ア行)・寝(ナ行)・経(ハ行)  
…語幹・語尾の区別がなく、終止形が  
一字の動詞。  
植う・飢う・据う(ワ行)…3語

4 上二段活用動詞

射る・铸る(ヤ行)  
居る・率る(ワ行)

●似ている動詞

・見る(上一段活用) / 見ゆ(下二段活用)  
・聞く(四段活用) / 聞こゆ(下二段活用)  
・居る(上一段活用) / 居り(ラ行変格活用)  
・去る(四段活用) / 去ぬ(ナ行変格活用)  
・来(カ行変格活用) / 来たる(四段活用)

1 次の動詞を( )の活用形に改めなさい。

- ①す (未然形)      ②据う(未然形)      ③蹴る(連用形)  
④恨む(連体形)      ⑤恥づ(已然形)      ⑥聞こゆ(命令形)

④	①
⑤	②
⑥	③

2 次の①～④の動詞の語群の中に、それぞれ一語だけ活用の違うものがあります。その動詞を抜き出し、活用の種類を答えなさい。

- ①煮る 射る 着る 見る 流る 干る  
②帯ぶ 減ぶ 過ぐ 逃ぐ 起く 尽く  
③旅す 愛す 具す 論ず 混ず 先んず  
④足る 蹴る 借る 移る 散る 走る

③	①
活用	活用
④	②
活用	活用

3 次の傍線部の動詞を、終止形に改め、活用の種類も答えなさい。(ただし、アは平仮名で答えなさい。)

- ①男はこの女をこそ得めと思ふ。  
②我が背子が植ゑし秋はぎ。  
③みかきもり衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつつ物をこそ思へ  
④見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む

自動詞と他動詞 (↓ p. 34)

\*自動詞 (主 語) が する

流る・吹く・光る・立つ(四段)

\*他動詞 (目的語) を する

流す・吹く・立つ(下二段)

「立つ／立てる」「流れる／流す」のようによく似たペアがあるものもあるが、「風が」吹く／(灰を)吹くのように同型のもの、「光る」「読む」のようにペアがないものもある。

また、「立つ」は四段であれば現在の「立つ」で自動詞、下二段であれば現在の「立てる」で他動詞となる。

補助動詞 (↓ p. 34)

動作を表さず、上の語や文節にある意味を添えるだけのもの。  
笑ひたまふ・堀にてありければ

③	①
活用	活用
形	形
④	②
活用	活用
形	形

4 次の傍線部の動詞について、活用の種類と活用形とを示し、かつ自動詞か他動詞かの区別を示しなさい。

- ①野中に丘だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。  
②楽器をとれば音を立てむと思ふ。  
③物語のおほく候ふなる、ある限り見せ給へ。  
④あかねさす紫野行きしめ野行き野守は見ずや君が袖ふる

- ヒント  
1 (↓ p. 21 ~ 33)  
現代語とは活用が違う動詞。  
十分に注意しながら考えよう。  
①サ変動詞。  
②「据えズ」か「据ゑズ」か。紛らわしいワ行の下二段活用。  
③下一段活用。  
④⑤上二段活用。  
⑥紛らわしいヤ行の下二段活用。3を参照)  
2 (↓ p. 21 ~ 33)  
それぞれの語群の動詞は①上一段活用動詞  
②上二段活用動詞  
③サ変複合動詞  
④四段活用動詞  
これ以外の動詞を探す。

3 (↓ p. 21 ~ 29)  
③④⑤⑥、⑦は、ヤ行の動詞。

4 (↓ p. 34)  
①は「立つ」、②は「立てる」の意味。  
③は「見す」で、見せるの意。  
用言「給へ」に続いている。  
④は「見る」。下二段の「見ゆ」は、見える(自動詞)の意。  
「あかねさす」(あかね色に美しく映え輝く意から)、「日・光・紫」などにかかる枕詞。

形容詞 (↓ p. 36 ~ 37)

言い切りの形(終止形)が、「し」で終わる。

ク活用

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
から	かり	く	き	けれ	かれ

シク活用

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
しから	しかり	し	しき	しけれ	しかれ

ク活用・シク活用の見分け方 (↓ p. 36)

ク活用・シク活用Ⅱ「なる」をつけて判断する。

本活用とカリ活用 (↓ p. 36)

- ① 右側を本活用と呼ぶ。こちらをまず覚える。
- ② 左側をカリ活用(補助活用)と呼ぶ。本活用の連用形「く」にラ変動詞「あり」がついて「なく+あり」↓「なかり」となったので、活用はラ変型である。
- ③ カリ活用は、助動詞に続く場合や命令して言い切る場合に用いられる。ただし、断定の助動詞「なり」だけは、本活用に続く。

1 次の形容詞の活用表を完成させなさい。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
① なし	な	( )						
② 久し	久	( )						
								活用
								活用

2 次の傍線部の語について、活用の種類と活用形をそれぞれ答えなさい。

- ① 見みうるはしく、情けあり  
顔かたち
- ② 水清ければ魚棲うまず
- ③ 苦くるしことのみ多かりき  
多かった
- ④ 月なききみにきらめく光
- ⑤ 祝ふ今日こそこそ楽しけれ  
つきてんしん
- ⑥ 月天心てん貧しき町を通りけり

⑤	③	①
活用	活用	活用
形	形	形
⑥	④	②
活用	活用	活用
形	形	形

3 次の各文の□内の形容詞を( )内に示した活用形に改めなさい。

特別な形 (↓ p. 36 ~ 37)

- ① 「多し」だけは、下に助動詞が続かない場合でもカリ活用が用いられた。また、カリ活用の終止形や已然形も見られる。  
・昨夜の鮎あゆいと多かり。(蜻蛉日記・中)  
昨夜の鮎が、たいそう多い。
- ② 本活用の未然形は、「くは」の形で表れ、この場合は「もしくなら」と訳す。  
・恋しくは、来ても見よかし。  
(伊勢物語・七一段)  
もし恋しいなら、来て会いなさい。

形容詞の語幹の用法 (↓ p. 40)

- (1) 形容詞の語幹・形容詞の語幹+や・の感動表現  
・あな、をさなや。 まあ、幼いんだよ。  
・あな、おもしろのうの音や。  
ああ、おもしろい筆の音色よ。

- (2) 体言(を)+形容詞の語幹+み原因・理由(…が…ので)  
・山深み 山が深いので

活用	形	活用	形
----	---	----	---

4 次の文章から形容詞(二つ)を抜き出し、活用の種類と活用形を答えなさい。

ぬかづき虫、またあはれなり。さる心地に道心おこしてつきありくらむよ。  
虫の心なのに  
頭を下げて歩き回る  
思ひかけず、暗き所などに、ほとめきありきたるこそをかしけれ。  
こいこいこと音をたてて

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
	⑦	③
	⑧	④

- ① ちちに物こそ かなし (已然形) いろいろ
- ② いつ見きとてか 恋しらむ (連体形) こんなに恋しいのだからか
- ③ おほけなし うき世の民におほふかな (連用形) 分不相応にも 覆いかけることだよ
- ④ なほうらめし 朝ばらけかな (連体形) それでもやはり
- ⑤ 惜しざりし命さへ (未然形) までも
- ⑥ 花も紅葉も なしけり (連用形) もみぢ
- ⑦ はげしとは祈らぬものを (命令形) 祈らなかつたのになあ
- ⑧ 恋にくちなむ名こそ 惜し (已然形) すたれてしまいに違いない
- ⑨ 月明かし ば、いとよくありさま見ゆ。 (已然形) 実によく様子が見える
- ⑩ なくても よしべしと見えたるに、(連体形) よいだろうと思われたが、

ヒント (↓ p. 36)

- 2 (↓ p. 36 ~ 37)  
① 「うるはしく」と連用形で、いったん文を中止している。  
[テキスト ↓ p. 42] 連用中 止法]
- ④ み空Ⅱ空の美称。

3 (↓ p. 36 ~ 37)

- ② 「らむ」 ⑤ 「ざり」
- ⑥ 「けり」 ⑩ 「べし」  
形容詞の下に助動詞が続く場合には、補助(カリ)活用が使われる。
- ⑦ 命令形は補助活用にしかない。
- ⑨ 「未然形+ば」は「もし…なら(ば)」「已然形+ば」は「…ので」と訳す。ここでは「明るいので」という意。
- ⑩ 「べし」は終止形(ラ変型)の場合は連体形に接続する。







1 次の傍線部の用言(動詞・形容詞・形容動詞)の、品詞名・活用の種類・活用形を、それぞれ答えなさい。

- ① 忘るる間まぞなきゆく年月としつき
- ② かれてさびしくなりにけり
- ③ 時にあらずと声も立てず  
まだその時でない
- ④ のどかなりや春の空
- ⑤ しのび音ねもらす夏は来ぬ  
初音をもらす 夏が来た
- ⑥ 幾とせふるさと来てみれば
- ⑦ 天下に旅する剛毅がうきのものもののふ  
たくましいさむらい
- ⑧ 峰より落つる滝の音
- ⑨ 峨々ががたる巖いわつらなりて

⑨	⑦	⑤	③	①
活用	活用	活用	活用	活用
形	形	形	形	形
	⑧	⑥	④	②
	活用	活用	活用	活用
	形	形	形	形

2 次の傍線部はいずれも、形容詞・形容動詞の特別な用法である。どのような用法か、後の説明から選び、記号で答えなさい。

- ① 山高み見つ我が来し桜花風は心に任すべらなり  
自由にゆすったり、散らしたりしているようだ
- ② あらたふと青葉若葉の日の光  
ああなんと
- ③ むざんやな甲かぶとの下のきりぎりす

ア 語幹だけで感動を示す。 イ 語幹に助詞を伴って感動を示す。 ウ 語幹に接尾語を添えて原因・理由を示す。

3 次の文中から音便形を含む文節を傍線で示し、もとの形を解答欄に答えなさい。(なお、音便形は四つある。)

(能登守教経は) 判官(源義経)の船に乗りあたつて、「あはや」と目をかけて飛んでかかるに、判官、かなはじと思

はれけむ、長刀脇ながやうわきにかいばさみ、味方の船の二丈ばかり退いたりけるに、ゆらりと飛び乗りましたまひぬ。  
離れた味方の船に、

①	②	③	④

4 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

翁、竹を取ること久しくなりぬ。勢いほひ猛まうの者になりにけり。この子いと大みほろどいきなりなりぬれば、名を、御室戸斎部の秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。このほど三日うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず呼び集へて、いとかしこし遊ぶ。世界のをのこ、あてなるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、好みせず。見てしがなと、音に聞き、めでて惑ふ。結婚したいものだ 噂 心惹かれ思い悩む。

問1 傍線部①～④の用言の基本形、活用の種類、文中での活用形を答えなさい。

問2 部ABの用言を正しく活用させて書きなさい。

問3 傍線部⑤⑥の用言の活用表を完成させなさい。(ただし、活用形の欄は活用語尾だけを平仮名で記せばよい。)

問1	問2	問3
③	A	⑤
①	B	⑥
活用	基本形	
活用	語幹	
形	未然形	
形	連用形	
形	終止形	
形	連体形	
形	已然形	
形	命令形	

○ ヒント

- ① ↓ p.22～39 「名詞＋す」の複合動詞。
- ⑦ 「名詞＋す」の複合動詞。

2 ↓ p.40

- ① 山高し(形容詞)
- ② たふとし(形容詞)
- ③ むざんなり(形容動詞)

3 ↓ p.41

音便

単語中のある音が、発音の便宜上、変化すること。  
・イ音便：書きて↓書いて 浅き夢↓浅い夢  
・ウ音便：歌ひて↓歌うて 浅くて↓浅うて  
・撥音便：飛びて↓飛んで 多かるめり↓多か  
・促音便：打ちて↓打つて  
・記しにくいことが多い  
・「ん」を表す  
・「多かめり」のように「ん」を  
・「多かるめり」のように「ん」を

壇ノ浦で平家が滅びるとき、最後の力をふりしぼって奮戦する平教経と、源氏の大將源義経との合戦の様子である。

4 ↓ p.20～39

かぐや姫が竹取の翁のもとで成長し、成人の儀式を迎える場面。

④ 「高貴だ」の意。

問1

A下の「なり」は動詞。

B下の「遊ぶ」は動詞。

名詞の種類		(↓ p.46)
普通名詞	女・川・物語 など	
固有名詞	小野小町・筑紫 など	
数詞	一つ・五番目・八代目 など	
形式名詞	こと・もの・ほど など	
代名詞	われ・なれ・これ など	

主な連体詞 (↓ p.47)

ある・あらゆる・いんじ・さる

主な陳述(呼応)の副詞		(↓ p.48・50～51)
打消	え・いさ・さらに・つゆ・よも	
禁止	ゆめ・ゆめゆめ・なむべ・げに・けだし・さだめて	
推量	あたかも・さながら	
比況	いかが・いかに・いかで・など	
疑問・反語・推量	いかが・いかに・いかで・など	
意志・希望	いかで	
仮定	たとひ・よし・もし	

1 次の傍線部の語は、(ア普通名詞・イ固有名詞・ウ数詞・エ代名詞)のどれか、記号で答えなさい。

- ① 柿本人麻呂なむ歌の聖なりける ( )  
② もののあはれは秋こそまされ ( )  
③ われ、この所に住みはじめしとき ( )

2 次の各文から副詞と、その副詞が修飾している文節をそれぞれ抜き出して答えなさい。

- ① ただ有明の月ぞ残れる ② かたみに袖をしばりつつ  
③ 人はいさ心も知らず

①	↓
②	↓
③	↓

3 次の各文の( )に入る適当な副詞を後から選び、記号で答えなさい。(なお、傍線部はその副詞に呼応している語である。参考にすること。)

- ① ( )、その人にまろありと宣ふな ( )  
② 今は逃ぐとも、( ) 逃がさじ ( )  
③ あとまで見る人ありとは ( ) か知らむ ( )  
④ 人の誇りをも ( ) 憚らせ給はず ( )  
⑤ ( ) 習ひあることに侍らむ ( )

主な接続詞 (↓ p.52)

並列	および・ならびに・また
選択	あるいは・または・はた
添加	かつ・ついで・なほ
順接	されば・ゆゑに・さらば
逆接	されども・しかしながら

主な感動詞 (↓ p.53)

感動	あはや・あはれ・すは
呼びかけ	いかに・いざ
応答	いさ・えい・おう

副詞と接続詞の判別

副詞(位置を移動できる)

- ・ 今日また山を越ゆ。  
・ また今日山を越ゆ。  
接続詞(位置を移動できない)  
・ 山また山を越ゆ。

形容動詞と副詞の判別 (↓ p.49)

- 次の場合は、形容動詞である。  
① 「たいへん」をつけて訳せる。  
② 活用する語。

ア いかで イ よも ウ ゆめ エ さだめて オ え

4 次の各文中には、(ア連体詞・イ接続詞・ウ感動詞)のどれかが一つある。その語を抜き出し、品詞名を記号で答えなさい。

- ① 近き世に、その名聞こえたる人は、すなはち僧正遍昭は、  
② あはや、源氏の先陣は向かふたるは。  
③ 枝の長さ七尺、あるいは六尺。  
④ いはゆる西方浄土に生まれたるやうになむ。

5 次の傍線部の語の品詞名を答えなさい。

- ① し残したるを、さて打ち置きたるは面白く、  
② さて、その国に在る女をよばひけり。

①	②
---	---

6 次の傍線部の語は、(ア形容動詞の連用形・イ副詞)のどちらか、記号で答えなさい。

- ① さらに悲しきことは多かるべき。  
② 富士の裾野になりぬれば、北には青山峨々として、  
③ まめやかに言ふ人、ひとりぞある。  
④ しかとあらぬひげ掻き撫でて

○ ヒント  
① は奈良時代の歌人。

2 (↓ p.48～51)  
「文節」という語に注意 (↓ p.10)。

文節の初めには、必ず自立語が一つだけある。

② 「つつ」③ 「ず」は、付属語。

3 (↓ p.50～51)  
① 決して……するな  
② まさか……ことはないだろう  
③ どうして……か  
④ よく……できず  
⑤ きつと……だろう(こざいましょう)

4 (↓ p.47・52～53)  
① 「その」は口語では連体詞だが、文語では「そ」(名詞)＋「の」(助詞)の二語から成る。

5 (↓ p.48～52)  
位置を移動できるか、できないかで見分ける。

6 (↓ p.49)  
傍線部の語を、形容動詞の終止形(「なり」・「たり」)に言い換えてみて、成り立つかどうか。

助動詞の活用

助動詞の多くは、例のように動詞・形容詞・形容動詞(用言)と同じ型で活用する。したがって、「○行△段活用」とはいわずに、「△段型」と分類する。

【例】ラ行下二段活用動詞「流る」  
助動詞「る」(下二段型)

語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
流る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ

四段型 む・らむ・けむ

※「む」で終わる推量の助動詞。  
下二段型 る・らる

※尊敬の助動詞と完了「つ」。  
ラ変型 けり／たり・り(完了)  
めり／なり(伝聞推定)

※「り」で終わる助動詞。  
ナ変型 ぬ  
サ変型 むず

形容動詞型 べし・たし・ごとし  
まじ・まほし

※「し(じ)」で終わる助動詞。  
形容動詞型 なり・たり(断定)  
不変化型 らし／じ  
特殊型 き／ず／まし

1 次の助動詞①～⑰の活用表を完成させなさい。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
① む	( )	○				○	型
② る							型
③ す							型
④ しむ							型
⑤ つ							型
⑥ けり	( )	○				○	型
⑦ めり	○	( )				○	型
⑧ ぬ							型
⑨ むず	○	○				○	型
⑩ べし	( )		○		○	○	型
⑪ まじ	( )		○		○	○	型
⑫ なり(断定)							型

○ヒント

- ① ↓ p. 56 ~ 59
- ② 下に「ず」をつけて考えてみる。
- ③ 「り」となる動詞に準じる。
- ④ 「死ぬ」「去ぬ」という動詞に準じる。
- ⑤ 「むとす」からできた語なので、動詞「す」に準じる。
- ⑥ 「し」となる用言に準じる。
- ⑦ 「なり」「たり」となる用言に準じる。
- ⑧ 「し」となる用言に準じる。
- ⑨ 「し」となる用言に準じる。
- ⑩ 「し」となる用言に準じる。
- ⑪ 「し」となる用言に準じる。
- ⑫ 「し」となる用言に準じる。
- ⑬ 「し」となる用言に準じる。
- ⑭ 「し」となる用言に準じる。
- ⑮ 「し」となる用言に準じる。
- ⑯ 「し」となる用言に準じる。
- ⑰ 「し」となる用言に準じる。

助動詞の接続

助動詞の多くは、未然形・連用形・終止形のいずれかに接続する。

未然形  
＋る・らる(自発など)  
＋す・さす・しむ(使役・尊敬)  
＋ず(打消)  
＋む・むず(推量)  
＋まし(反実仮想)  
＋じ(打消推量)  
＋まほし(希望)

連用形  
＋き・けり(過去)  
＋つ・ぬ・たり(完了)  
＋けむ(過去推量)  
＋たし(希望)

終止形  
ラ変型の連体形  
＋らむ(現在推量)  
＋べし(推量)  
＋なり(伝聞推定)  
＋めり・らし(推定)  
＋まじ(打消推量)

サ変の未然形  
四段の命令形  
＋り(完了)

体言  
連体形  
＋なり・たり(断定)  
＋ごとし(比況)

●助動詞の補助活用 形容詞と同じく、形容詞型(カリ活用)と打消「ず」(ラ変型)は、下に助動詞が続くときに主に用いられる。

2 次のそれぞれの( )に、下の語を活用させて入れなさい。

⑬ たり(断定)							型
⑭ じ	○	○				○	型
⑮ き	( )	○				○	型
⑯ ず	(ず)	○				○	型
⑰ まし	ましか(ませ)	○				○	型

- ① 花 ( ) けり。 咲く
- ② 花 ( ) べし。 咲く
- ③ 花 ( ) り。 咲く
- ④ 水 ( ) なり。(伝聞推定) 流る
- ⑤ 水 ( ) なり。(断定) 流る
- ⑥ 時 ( ) ぬ。 過ぐ
- ⑦ 供に ( ) たり。(完了) 具す
- ⑧ 人を喜ば ( ) む。 しむ
- ⑨ 人に勝る ( ) き。 まじ
- ⑩ 故郷に帰る ( ) めり。 べし

2

- ① 「けり」⑥ 「ぬ」⑦ 「たり」(完了)⑨ 「き」は連用形接続。
- ② 「べし」④ 「なり」(伝聞推定)⑩ 「めり」は終止形(ラ変型は連体形)接続。
- ③ 「り」はサ変未然形・四段命令形(已然形)接続。
- ⑤ 「なり」(断定)は体言・連体形接続。
- ⑧ 「む」は未然形接続。



自発・可能・受身・尊敬「る・らる」

(↓ p. 60～61)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	る	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らる	らるれ	られよ

(エ・エ・ウ・うる・うれ・エよ)

ともに下二段型

●接続  
\*「る」「す」と「らる」「さす」  
接続の違いを参照。

●意味

1 自発(自然と…れる／られる・ふと…れる／られる・思わず…れる／られる)

2 可能(…ことができる)

3 受身(…れる・…られる)

4 尊敬(お…になる・…なさる)

●意味の見分け方

心情語・知覚語＋…らる ↓ 自発

…らる＋打消・反語 ↓ 可能

動作の相手(に)＋…らる ↓ 受身

主語が貴人・尊敬語＋…らる ↓ 尊敬

使役・尊敬「す・さす・しむ」

(↓ p. 62～63)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ

1 次の傍線部の助動詞は、(a 自発・b 可能・c 受身・d 尊敬)のうちいずれの意味か、記号で答えなさい。

① 雨降りなどすれば、恐ろしくて寝も寝られず。

② 子ゆゑにこそよろづのあはれは思ひ知らるれ。

③ 駿あらむ僧たち、祈り試みられよ。

④ などかくわすれつるならむ。これに教へらるるをかし。

⑤ かなしくて、人知れず泣かれぬ。

2 次の文中の( )の「る」「らる」を( )の活用形に改めなさい。

① 目も見えず、ものも言は(る)ず。 〈未然形〉

② やがて面影は推しはから(る)心地するを、 〈連体形〉

③ わが身さへこそ揺るが(る)。 〈已然形〉

④ 水深く、陰涼しからんところを求め(らる)。 〈命令形〉

3 次の傍線部の助動詞は、(a 使役・b 尊敬)のうちいずれの意味か、記号で答えなさい。

① そのこの馬を走らしむるを見て、…

② 君すでに都を出でさせ給ひぬ。

③ 妻の女にあづけて養はす。

④ 重ねて問はせ給はば、いかが申さむ。

○ヒント

1 (↓ p. 60～61)

① 寝も寝寝つく。「寝」は名詞。「寝」は、ナ行下二段動詞。

③ 駿あらむ僧修法の効果のありそな僧。「駿」は加持・祈禱などの修法の効験、しるし。

2 (↓ p. 60)

「る」「らる」ともに下二段型。直前の語の音で、「る」か「らる」かを判断する。

3 (↓ p. 62～63)

②④は尊敬語「給ふ」が下にあるが、①③は尊敬語が下がない。

さす	させ	させ	さす	さする	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しめよ

(エ・エ・ウ・うる・うれ・エよ)

いずれも下二段型

●接続  
\*「る」「す」と「らる」「さす」  
接続の違いを参照。

未然形＋「しむ」

●意味

1 使役(…せる・…させる)

2 尊敬(お…になる・…なさる)

●意味の見分け方

使役＝単独で用いられた場合。

尊敬＝必ず下に尊敬語を伴う。

せ	＋給ふ
させ	＋おはします
しめ	

\*ただし、「使役の対象」(～)に「が」が示されている場合(省略もある)は「使役」になるから、注意する。

「る」「す」「らる」「さす」接続の違い

(↓ p. 62)

ア段の音

四段

ラ変

ナ変

の未然形

＋る・す

ア段以外の音

＋らる・さす

4 次の文中の( )の「す」「さす」「しむ」を( )の活用形に改めなさい。

① 月の都の人、まうで来ば、とらへ(さす)む。 〈未然形〉

② 夜を昼になして取ら(しむ)給ふ。 〈連用形〉

③ 僕に酒飲ま(す)ことは心すべきことなり。 〈連体形〉

④ 皆とり出だして食は(しむ)ば、 〈已然形〉

①	②	③	④
---	---	---	---

5 次の( )内の「る・らる」「す・さす」のいずれかを選び、適当な形に活用させなさい。

① 人々に物語などを読ま(す・さす)て、聞き給ふ。

② ありがたきもの。舅にほめ(る・らる)婿。

②	①
---	---

6 次の各文から「る・らる」「す・さす・しむ」を抜き出し、その文法的意味を答えなさい。

① 人に食はすることなし。ただひとりのみぞ食ひける。

② なきことにより、かく罪せられ給ふを、

③ 仮りの宿り、誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。

④ なほこそ国の方は見やられる、わが父母ありと思へば。かへらや。

③	①	④	②
---	---	---	---



過去「き」

〔p. 64〕

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	(せ)	○	き	し	しか	○

特殊型

●接続 連用形 + 「き」

\*カ変・サ変は、未然形に接続する場合もある。

●意味  
1 過去 (直接の経験過去)「**…た**」  
過去「**けり**」〔p. 64～65〕

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

ラ変型

●接続 連用形 + 「けり」

●意味

1 過去 間接の伝聞過去)  
「**…た(そうだ) ……た(とさ)**」  
2 詠嘆 気づきの「けり」  
「**…(だ)なあ…だった**」

完了「つ・ぬ」

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

つ 下二段型、ぬ ナ変型

●接続 連用形 + 「つ」「ぬ」

●意味

1 次の傍線部の助動詞の意味(過去・詠嘆)と、活用形を答えなさい。  
① 見れば率て来し女もなし。  
② 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。  
③ 「犬なども、かかる心あるものなりけり。」  
(人間のような心が)

③	①
形	形 ②
	形

2 次の傍線部の助動詞の意味(完了・強意・存続)と、活用形を答えなさい。

① 花の色は移りにけりな。  
② 衣着せつる人は、心異になるなりといふ。  
③ 舟歌うたひて、何とも思へらず。  
④ 詠みてむやは。詠みつべくは、はや言へかし。  
⑤ 父はこれをうち捨てて、十余町こそ逃げのびたれ。  
わが子を捨ててしまつて、

④	③	①
形 ⑤	形 ④	形 ②
形	形	形

3 打消の助動詞「ず」を、それぞれ次の( )の活用形に改めて接続させなさい。

① 言は連用形して、  
② 咲か(連体形)時  
③ 去ら(已然形)ど、  
④ 逢は(未然形)む。  
⑤ 捨て(連体形)べし。  
⑥ 許さ(命令形)。

⑤	①
⑥	②
	③
	④

4 次の傍線部の「ぬ」「ね」を、例にならつて説明しなさい。

例 たれこめて春のゆくへ知らぬ間に ↓ 打消の助動詞「ず」の連体形  
部屋の中に閉じこもつて  
① 風吹きぬ。  
② 作り果てぬ所を残す。  
③ 絶えなば絶えね。  
絶えてしまふのならば

③	②	①

5 次の各文から「き・けり」「つ・ぬ・り」を、それぞれ二つずつ抜き出し、文法的意味と活用形を答えなさい。

① さやうの人の祭り見しさいとめづらかなりき。  
② 年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。  
③ 道知れる人もなくてまどひ行きけり。  
さまよいながら

③	②	①
形	形	形
形	形	形

○ヒント  
1 〔p. 64～65〕  
詠嘆は和歌や会話文で用いられる。

2 〔p. 66～69〕  
④ 「て」は推量「む」が、「つ」は推量「べし」が、それぞれ下にある。

3 〔p. 70〕

① ～③ 右側の特殊型活用を使う。  
④ ～⑤ 下に助動詞が続くときは、左側の補助活用(ラ変型)を使う。

4 〔p. 70～71〕  
① 四段活用「吹く」の連用形に続いている。  
② 下に「所」という体言がある。  
③ 下に「。」があるので、終止形か命令形。

5 〔p. 64～69〕  
① 「見る」マ行上一段活用。  
② 「思ふ」ハ行四段活用。「はべり」ラ行変格活用。  
③ 「知る」ラ行四段活用。「行く」カ行四段活用。

● 推量「む(ん)」「むず(んず)」 (↓ p. 72～73)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む(ん)	(ま)	○	む	む	め	○
(むず)	○	○	むず	むずる	むずれ	○

● 活用 「む」は、「む／む／め」と覚える。

● 接続 未然形 + 「む」「むず」

● 意味

- 1 推量 (…だろう)
- 2 意志 (…よう・…たい・…つもりだ)
- 3 適当・勧誘 (…がよい・…しませんか)
- 4 仮定・婉曲 (もし…としたら・…のような)

● 意味の見分け方

- 1 推量 主語が三人称の場合が多い。
- 2 意志 主語が一人称の場合が多い。
- 3 適当・勧誘 主語が二人称の場合が多い。  
\* 多くは「こそめ」「なむ」の形。
- 4 仮定・婉曲 文中にあり連体形の場合。

● 推量「らむ(らん)」 (↓ p. 74)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(らん)	○	○	らむ	らむ	らめ	○

● 接続 終止形(ラ変型の連体形) + 「らむ」

● 意味

- 1 次の「来」の読みを、助動詞の接続に注意して答えなさい。  
① 来む。( )      ② 来らむ。( )      ③ 来けむ。( )

- 2 次の傍線部の口語訳を、後から選び記号で答えなさい。  
① 春風吹かむ。( )      ② 春風吹くらむ。( )  
③ 春風吹きけむ。( )      ④ 春風吹きぬべし。( )

- ア きつと……吹くだろう      イ (あの時は)……吹いただろう  
ウ (やがて)……吹くだろう      エ (今ごろは)……吹いているだろう

- 3 次の傍線部「む・むず・らむ・けむ」の文法的意味を後から記号で選び、その活用形も答えなさい。  
① 花を見てこそ帰りましたはめ。      ② 今はほどなく夜も明けなむず。  
③ いづくよりや帰られたりけむ。      ④ 男はこの女をこそ得めと思ふ。  
⑤ 桜の散らむことは、いかがせむ。      ⑥ 泣き悲しめども、聞くらむともおぼえず。

- ア 推量      イ 意志      ウ 適当・勧誘  
エ 仮定・婉曲      オ 現在推量      カ 過去推量

④	①				
		形 ⑤		形	形 ③
				形 ⑥	
					形

- 4 次の傍線部「べし」の文法的意味を後から記号で選び、その活用形も答えなさい。

- 1 現在推量 (…今ごろは)……ているだろう
- 2 現在原因推量 (…どうして)……ているのだろう
- 3 現在伝聞・現在婉曲 (…とかいう)……ような

● 推量「けむ(けん)」 (↓ p. 75)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(けん)	○	○	けむ	けむ	けめ	○

● 接続 連用形 + 「けむ」

- 意味
- 1 過去推量 (…た(の)だろう)
- 2 過去原因推量 (…どうして)……たのだろう
- 3 過去伝聞・過去婉曲 (…たとかいう)……たような

● 推量「べし」 (↓ p. 76～77)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
べし	(へく)	べく	べし	べき	べけれ	○
	べから	べかり	○	べかる	○	○

● 接続 終止形(ラ変型の連体形) + 「べし」

● 意味

- 1 推量 (…だろう・…に違いない)
- 2 意志 (…よう・…つもりだ)
- 3 適当・当然 (…がよい・…はずだ)
- 4 義務・命令 (…(する)べき・…なさい)
- 5 可能 (…ことができる)

● 意味の見分け方 「む」と同じような目安で見分ける。

- ① 我はかくて閉ぢこもりぬべきぞ。

- ② 金は山に捨て、玉は淵に投ぐべし。

- ③ この大事は、博学の士もはかるべからず。

- ④ 人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。

- ⑤ 頼朝が首をはねて、わが墓の前に掛くべし。

- ア 推量      イ 意志      ウ 適当・当然      エ 義務・命令      オ 可能

④	①				
		形 ⑤		形	形 ③
				形	
					形

- 5 次の各文から「む・らむ・けむ」を、それぞれ解答欄の数だけ抜き出し、文法的意味を答えなさい。

- ① 思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。
- ② 薬師のもとにさし入って、向かひるたりけむ有様、さこそ異様なりけめ。
- ③ 憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ

③	③	②	①		
				③	②
					①

- ヒント
- 1 (↓ p. 72～75) 下につく助動詞の接続によって判断する。
- 2 (↓ p. 72～76)

- 3 (↓ p. 72～75) ①④こそ、③や、に注目。
- 5 は名詞「こと」が下にある。
- ④⑥の下にある「と」は引用を表す格助詞で、上は文末と考えられる。

- 4 (↓ p. 76～77)

- ① 主語は「我」。

- 5 (↓ p. 72～75) ① 「た／らむ」か「たらむ」か。
- ② 已然形。「こそ」の係り結び。
- ③ 「まか／らむ」か「まからむ」か。

反実仮想「まし」

(↓ p. 81)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
まし	ましか (ませ)	○	まし	まし	ましか	○

特殊型

●接続 未然形 + 「まし」

●意味

- 1 反実仮想(もし)：…なら…だろう(に)
- 2 ためらいの意志(…しようか)

●意味の見分け方

反実仮想Ⅱ「未然形 + ば…まし」

伝聞推定「なり」

(↓ p. 82)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	○	(なり)	なり	なる	なれ	○

ラ変型

●接続 終止形(ラ変型の連体形) + 「なり」

●意味

- 1 伝聞(人から聞いて)：…ということだ・…そうだ
- 2 推定(音や声を根拠に)：…ようだ

推定「めり」

(↓ p. 82)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○

ラ変型

- 1 次の傍線部を口語訳しなさい。
- ① あはれに泣くめれど涙落つとも見えず。  
しみみりと
  - ② 世の中に物語といふもののあんなるを、
  - ③ いかで年月を過ぎさましと思しやるる。  
おほ 自然とお思いやりになる
  - ④ なほ春のうちならましかば、いかにをかしからまし。  
やはり(晴くのが) 趣がある

①	②
③	④

- 2 次の和歌の、①推定の助動詞「らし」は、推定の根拠になっている部分(客観的な事実)をそのままの形で抜き出し、②反実仮想の助動詞「まし」は、事実はどういう状況なのか、( )に説明を補いなさい。

- ① み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり  
古都がますます寒くなっている
- ② 命だに心にかなふものならばなにか別れの悲しからまし  
せめて命だけでも思いどおりになるものならどつして

【事実】 命は ( )、別れが悲しい。

①
②

●接続 終止形(ラ変型の連体形) + 「めり」

●意味

- 1 推定(…ようだ) 2 婉曲(…ようだ)

推定「らし」

(↓ p. 83)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
らし	○	○	らし	らし (らしき)	らし	○

不変化型

●接続 終止形(ラ変型の連体形) + 「らし」

●意味 1 推定(…らしい)

打消推量「じ・まじ」

(↓ p. 84～85)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
じ	○	○	じ	じ	じ	○
まじ	(まじく) まじく まじから まじがり	○	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○

じ 不変化型、まじ 形容詞型

●接続 未然形 + 「じ」

終止形(ラ変型の連体形) + 「まじ」

●意味(「じ」は1・2のみ)

- 1 打消推量(…ないだろう)
- 2 打消意志(…まい…ないつもりだ)
- 3 不適當・打消当然

- 4 禁止(…てはいけない)
- 5 不可能(…ことができ(そうに)ない)

●意味の見分け方

「む」「べし」と同じような目安で考える。

- 3 次の傍線部の助動詞の文法的意味を後から記号で選び、その活用形も答えなさい。

- ① 「人にも漏らせ給ふまじ」と御口固め聞こえ給ふ。  
どなたにも 口止め
- ② 戯れにてもあるまじきことなり。  
あそび
- ③ 人のたはやすく通ふまじからむ所に籠る。  
こも
- ④ 私の従者をば具し候はじ。  
容易に 家来 連れて行く
- ⑤ その人はさだかにも知らじ。  
はつきりと

ア 打消推量    イ 打消意志    ウ 不適當・打消当然  
エ 禁止    オ 不可能

①	形	②	形	③	形	④	形	⑤	形
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 4 次の各文から「なり・めり・らし」「まし」を、それぞれ解答欄の数だけ抜き出し、文法的意味(推定・婉曲・反実仮想)を答えなさい。

- ① 山陰の暗がりたる所を見れば、螢はおどろくまで照らすめり。  
やまかげ 暗がりになっている
- ② かかる見えぬものあめるは。  
見慣れない人
- ③ 降る雪はかつぞ消ぬらし足引の山のとぎつ瀬音まさるなり  
あしひき 一方ではすぐに(解けて)消えてしまふ 水が激しく流れる
- ④ あはれ、わが道ならましかば、かく他所に見はべらじものを  
よそ かく他所に見はべらじものを このように無関係に傍観

④	③	①
	③	②

- ヒント
- ① (↓ p. 81～82) 「あんなる」は「あるなる」の撥音便。
  - ④ 「ましかば…まし」の文型。

- 2 (↓ p. 81～83)
- ① 推定の根拠 客観的な事実を根拠とした確かな推量。
  - ② 反実仮想の【事実】 事実に反する仮想なので、訳を裏返して事実を把握する。 —ではないので…ではない。

- 3 (↓ p. 84～85)
- 主語の人称によって意味を見分ける。

- 4 (↓ p. 81～83)
- ② 「あめる↑あんめる↑あるめる」。
  - ③ 「消ぬ」は力行下二段活用「消」の連用形と完了の助動詞「ぬ」の終止形。
  - ④ 「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形。



断定「なり」 (↓ p. 86～87)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ

形容動詞型

●接続 体言・連体形 + 「なり」

●意味

- 1 断定 (…(の)である…(の)だ)
- 2 存在 (…にある…(の)にいる)

\* 2は「場所+なる」の場合のみ。

「に」の識別 (↓ p. 87～88)

連体形・体言 + 「に」 ↓ 断定「なり」の連用形

\* 「に+助詞+あり」の形が多い。

連用形 + 「に」 ↓ 完了「ぬ」の連用形

\* 「に+き・けり」の形が多い。

断定「たり」 (↓ p. 87)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

形容動詞型

●接続 体言 + 「たり」

●意味 1 断定 (…である…だ)

「なり」「たり」の識別 (↓ p. 88～89)

なり

連体形

+ なり ↓ 断定

●体言 \* 助詞や副詞にもつく。

1 次の傍線部の助動詞の意味(断定・存在)を答え、訳の空欄を補いなさい。

① 今は亡き人なれば、かばかりの事もわすれがたし。

訳 今はこの世にない人 ( ) ので…。

② 神殿の御前なる獅子・狛犬、背きて、

訳 神殿のおん前 ( ) 獅子…、背中合わせになって、

2 次の傍線部「に」は(a断定、b完了)いずれの助動詞か記号で答えなさい。

① 心は君に寄りにしものを。

② おのが身はこの国の人にもあらず。

③ 舟こぞりて泣きにけり。

3 次の傍線部の助動詞の文法的意味を後から選び、記号で答えなさい。

① 妻戸を、かい放つ音すなり。

② つねよりももの思ひたるさまなり。

③ 清盛、嫡男たるによつて、その跡を継ぐ。

④ 月の都の人にて、父母あり。

ア 断定の助動詞「なり」 イ 伝聞推定の助動詞「なり」

ウ 断定の助動詞「たり」 エ 完了・存続の助動詞「たり」

4 次の動詞(聞く)を、直後の助動詞の接続にしたがって正しく活用させなさい。さらに傍

○ ヒント  
① (↓ p. 86～87)  
② は「場所+なる」のパターン。

② (↓ p. 87～88)  
接続している語によって判断する。

③ (↓ p. 86～89)  
① 「す」は終止形。  
② ④ は接続している語によって判断する。

④ (↓ p. 90)

「まほし」は未然形に、「たし」は連用形につく。希望は「…たい」と訳す。

⑤ (↓ p. 90～91)  
接続している語によって判断する。

⑥ (↓ p. 86～89)  
② 「なれ」は「…になる」という意味なので動詞。  
③ 「に」は格助詞。「…にある」と人から聞いて。

線部を口語訳しなさい。

① け近く(聞く)まほしからず。

② 常に(聞く)たきは、琵琶・和琴。

⑤ 次の各文の空欄に「まほし・たし・ごとし」のいずれかを選び、( ) の活用形に改めなさい。

① 扇をひろげたるが( )、末広になりぬ。〈連用形〉

② 少しのことにも、先達はあら( ) (ことなり。〈連体形〉)

③ あり( ) (事は、まことしき文の道…。〈連体形〉)

本格的な学問

⑥ 次の各文から「なり・たり」を、それぞれ解答欄の数だけ抜き出し、文法的意味(伝聞・推定、断定、完了)を答えなさい。

① 諸国の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだ許されず。

② 例ならず仰せ言などもなくて日ごろになれば、心細くてうち眺むるほどに、

長女、文を持て来たり。

③ 駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる。

山が実は、この都にも近く

●意味  
1 比況 (…(の)ようだ…(の)とおりに…(の)と同じだ)  
2 例示 (…(の)ような)

●接続  
連体形・体言 + 「ごとし」  
助詞「が・の」 + 「ごとし」

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

比況「ごとし」 (↓ p. 91)

●意味 1 希望 (…(の)たい…(の)てほしい)

●接続 未然形 + 「まほし」

連用形 + 「たし」

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
まほし	まほしく	まほく	まほし	まほしき	まほけれ	○
たし	たから	たかり	○	たかき	たけれ	○

希望「まほし・たし」 (↓ p. 90)

終止形  
ラ変型の連体形  
+ なり ↓ 伝聞推定  
\* 聴覚による推定

体言 + たり ↓ 断定

連用形 + たり ↓ 完了(存続)



1 次の各文の空欄部に入る助動詞を、傍訳を参考にして後から選び、正しく活用させなさい。

- ① 皆あ<sup>の</sup>のやうでこそあり<sup>。</sup>  
② 己<sup>の</sup>が行か<sup>。</sup> 処へ往ぬ。  
③ 人に食は<sup>。</sup> ことなし。
- ④ 穢<sup>ま</sup>き所のものきこしめし<sup>。</sup> ば、  
⑤ ほととぎすや聞き給へ<sup>。</sup>  
⑥ 髪上げ<sup>。</sup>、裳着す。  
⑦ その心御覽ぜ<sup>。</sup>  
⑧ 姑<sup>の</sup>に思は<sup>。</sup> 嫁の君。

助動詞【る・らる・す・さす・たり・り・たし・まほし】

⑥	①
⑦	②
⑧	③
	④
	⑤

2 次の各文から助動詞を、それぞれ二つずつ抜き出し、文法的意味と活用形を答えなさい。

- ① 増賀<sup>の</sup>ひじりのいひけむやうに、名聞<sup>の</sup>苦しく、仏の御教<sup>の</sup>への違ふらむとぞおほゆる。
- ② 世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
- ③ 心も浮き立つものは、春の気色<sup>の</sup>にこそあめれ。

③	②	①
形	形	形
形	形	形

○ ヒント

- ① ① p.60～63、68～69、90  
意味と接続から入れる語を判断し、下の語から活用形を判断する。
- ② 「こそ」の結び。
- ③ 体言に続く場合は、本活用を用いる。
- ④ 傍訳「ので」から「已然形＋は」だとわかる。
- ⑤ 「や」の結び。
- ⑥ 「、」に続く。
- ⑦ 「ご覧になってください」にふさわしい活用形にする。
- ⑧ 「嫁の君」は体言。
- ② ② ① p.60～91  
② 「未然形＋は…まし」の形になっている。
- ③ 「あめれ」は「あるめれ」の撥音便の無表記。

3 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

九月二十日の頃、ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩くこと侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬにほひ、しめやかにうちかをりて、忍びたる気配、いともものはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、なほことさまの優に覚えて、もののかくれよりしばし見わたるに、妻戸をいま少し押し開けて、月見る気色なり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは、いかでか知らむ。かやうのことは、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人、程なくうせにけりと聞き侍りし。

- 問1 傍線部①～⑧の助動詞の、文法的意味、基本形、文中での活用形を答えなさい。
- 問2 二重傍線部Aについて、次の(1)(2)に答えなさい。  
(1)口語訳しなさい。なお、「かけこもる」は「鍵をかけて部屋に入る」の意である。  
(2)実際にはどうであったのか、説明しなさい。
- 問3 二重傍線部Bを口語訳しなさい。

問3	問2	問1
	(2) (1)	⑦ ⑤ ③ ①
		形 形 形 形
		⑧ ⑥ ④ ②
		形 形 形 形

- ③ ③ ① p.60～91  
問1 「ある人に」に注目。  
② 下に体言「時」を補うことができる。  
③ は尊敬語に続いていない。  
④ ⑧ は下に「、」⑤ は下に体言がある。  
⑥ 「気色」は体言。  
⑦ 「か」の結び。
- 問2 A 「ましかば…まし」の形になっている。  
問3 B 「侍り」は「～ます」と訳す。



副助詞 (⇩ p. 113 ~ 116)

- だに 重いものを類推(…さえも)
- すら 最低限度の希望(せめて…だけでも)
- さへ 重いものを類推(…さえも)
- のみ 限定・強意
- ばかり 限定・程度
- し 強意
- など 例示・婉曲
- まで 限界・程度

係助詞 (⇩ p. 117 ~ 119・123)

係助詞		意味		
は・も	強意	強意	結び	
こそ				疑問・反語
や・か				連体形
は・も	已然形			
区別／例示・強意など				

「は」「も」はふつうに終止形で終わる

係り結びの口語訳 (⇩ p. 118 ~ 119)

- ①ぞ・なむ・こそ 強意…とくに訳さなくてもよい。
- ②や・か 疑問…か。
- 反語…か。いや〜ではない。

1 次の各文の( )に、傍訳を参考にして、適当な副助詞を後から選び、記号で答えなさい。

- ① 雨風、降りふぶきて、雷( ) 鳴りてとどろくに、
- ② 鳥けもの( ) 子を生みて世を楽しむに。
- ③ 寒きに、火( ) 急ぎおこして
- ④ わが目には、今年( ) の春行かむとす。

2 次の傍線部の副助詞の用法は、後のどれにあたるか、記号で答えなさい。

- ① ありあけの月と見るまでにふれる白雪 ( )
- ② 待つとし聞かばいま帰り来む ( )
- ③ 我のみ知りて過ぎゆく月日 ( )
- ④ 馬・車の行き交ふ道だになし。 ( )
- ⑤ さくら花、今年ばかりは墨染に咲け ( )
- ⑥ 飲む水に影さへ見えて ( )

3 次の傍線部の係助詞に応じて( )の語を適当な活用形に改めなさい。

- ① 昨日なむ都に來(き)。( )
- ② 人こそ見え(ず)秋は來にけり。( )
- ③ 風吹かむとぞ木の葉さやげ(り)。( )

係助詞の注意すべき用法 (⇩ p. 119 ~ 121)

- 1文末の係助詞 「や」「か」が文末にくる場合、結びの連体形は存在しない。
- 2結びの省略 結びの語が類推しやすい言葉である場合は、省略されることがある。
- 3結びの流れ(消去) 結びとなるべき言葉が、法則に従わず、接続助詞を伴って下へ続くことがある。
- 4挿入文中の係り結び 挿入文中の係り結びは、挿入文の範囲の中で成立する。
- 5もぞ・もこそ 「ぞ」「こそ」に「も」がついて、**しては困る**という不安・危惧の気持ちをこめた意味になる。
- 6「こそ…已然形、…」の逆接用法 「こそ…已然形」の関係が、そこで切れずに(読点で) 後へ続く場合は、逆接の意味を伴って続いていく。
- 7呼びかけの「こそ」 **〈…やん〉**。会話文で、人名や役職名に続く場合に用いられる。

4 次の各文の係り結びについての説明は後のどれにあたるか、記号で答えなさい。

- ① 中納言はまだ参らせ給はぬにや。( )
- ② 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、
- ③ 御子はおはすや。( )
- ④ 葉のひろごりざまぞ、うたてこちたけれど、

5 次の傍線部を係助詞に注意して口語訳しなさい。

- ① 蓑笠やある。貸し給へ。
- ② 人もこそ来れ、いかにせんと胸つぶれて、いと恐ろし。

○ ヒント

- ① 添加。
- ② 重いものを類推。
- ③ 婉曲。
- ④ 限定。

2 (⇩ p. 113 ~ 116)

- ① 月と見間違えるまでに。
- ② 「待つと聞く」が「待つとし聞く」になるのだから。
- ④ もちろん、もっと広い道はない。
- ⑤ 人の死を嘆く心の歌である。

3 (⇩ p. 117 ~ 122)

- ① 下二段型 ② 特殊型
- ③ ラ変型 ④ ラ変動詞
- ⑤ 形容詞 ⑥ ラ変動詞

4 (⇩ p. 119 ~ 122)

- ① ③末尾の「や」が係助詞。
- ② 「こそあれ」が係り結び。
- ④ 本来は「ぞーこちたき」と連体形に結ばれる。

5 (⇩ p. 118 ~ 121)

- ① 疑問・反語の訳 まず疑問「…か」と訳し、その後文脈で反語なら「いや…ではない」を加える。



●終助詞〔↓ p. 125 ~ 127〕

禁止の終助詞

な 〈…な〉 そ 〈…ないでほしい〉

●接続

終止形 + な(禁止)

な…連用形 + そ(禁止)

な…力変の未然形 + そ

な…サ変の未然形 + そ

希望の終助詞

なむ 他に対する希望〈…てほしい〉

ばや てしか(な) にしか(な)

もが・もがな

自己の希望〈…たい〉

●接続

未然形 + なむ・ばや(希望)

連用形 + てしか・にしか(希望)

体言・連用形 + もが・もがな(希望)

詠嘆の終助詞

か・かな 〈…なあ〉

な は 〈…なあ〉

念押ししの終助詞

かし 〈…よ〉

●接続

1 次の傍線部の終助詞の意味用法を後から選び、記号で答えなさい。

① あはれに悲しきことなりな。

② 入らせたまはぬさきに雪降らなむ、  
中宮様が宮中へお帰りにならない前に

③ 今井がゆくゑを聞かばや。

④ あなかも、人に聞かすな。  
ああ静かに、

⑤ かの花は失せにけるは。

⑥ 彼はいとさまことなりし人ぞかし。  
実に様子の並はずれた人

⑦ 心あらむ友もがな。  
情緒を解する

⑧ このかぐや姫を得てしがな。

ア 禁止 イ 他に対する希望 ウ 自己の希望

エ 詠嘆 オ 念を押して強調

2 次の( )の動詞を、直後の終助詞の接続にしたがって正しく活用させなさい。

① あやまち(す)な。

② これに侍りとな人に知らせ(給ふ)そ。  
ここにおりますと

③ な起こし(奉る)そ。

④ ほととぎすの声たづねに(行く)ばや。

⑤ そこともいはぬ(旅寝す)てしか。  
ふつとふつともなく

⑥ 今ひとたびのみゆき(待つ)なむ。

●ヒント

① ④ 文脈から禁止か詠嘆かを判断する。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

体言・連体形 + か・かな・は(詠嘆)

…文末 + な(詠嘆)・かし(念押し)

●間投助詞〔↓ p. 128〕

や・よ 詠嘆・呼びかけ 〈…なあ……よ〉

を 詠嘆 〈…なあ〉

「や」の識別〔↓ p. 128〕

係助詞「や」

・省けば意味が通じない。文末が連体形になる。

●間投助詞「や」

・省いても意味が通じる。

「を」の識別

格助詞「を」

・体言に接続。連体形に接続している場合は、上に体言を補うことができる。

接続助詞「を」

・連体形に接続し、上に体言が補えない。

●間投助詞「を」

・省いても意味が通じる。

\*切れ字の「や」

俳句に用いる切れ字の「や」は、余韻(詠嘆)を持たせる間投助詞の用法である。

3 次の傍線部の「や」は、(ア)間投助詞・イ係助詞・ウ感動詞の二部のどれにあたるか、記号で答えなさい。

① 四条大納言、撰ばれたる物を道風書かむこと、時代や、たがひ侍らむ。  
違うのではないだろうか

② いでや、さ言ふとも田舎びたらむは  
めいているのではないだろうか

③ 人々の花蝶やとめづること、はかなくあやしけれ。  
愛しているのは、

④ 光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。

⑤ 親・はらからの中にも、思はる思はれぬがあるぞいとわびしきや。  
兄弟の中でも、

4 次の文章には助詞が八つある。順に抜き出して、助詞の種類を答えなさい。

池めぐてくぼまり水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、  
ちとせ千年や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。  
たってしまったのだろうか、半分は 新しく生えた松も

7 ⑤ ③ ①

助詞 助詞 助詞 助詞

8 ⑥ ④ ②

助詞 助詞 助詞 助詞

4 助詞の判別

〔↓ p. 98 ~ 128〕

接続助詞「て」「に」

に助動詞がつかない。

体言 + に 格助詞

連用形 + に 助動詞

完了の助動詞「ぬ」。

任期を終えて、久しぶりに我が家に帰ったときの、庭の様子を見ての気持ち。その変貌(変身)ぶりを嘆いている。

4 〔↓ p. 128〕

② いでや 〓 さあ、どうかなあ。

④ 本来は「この世にやはおはしける」となるべきところ。

39

38



1 次の傍線部のa~fの助詞の意味用法を後から選び、記号で答えなさい。

- ① まかでなむとし給ふを、暇いとまさらに許させ給はず。 (a) ( )
- ② いと清きよなる僧ぼんの、黄なる地の袈裟けさ着たるが来て、 (b) ( )
- ③ 寄りて見るに、筒の中光りたり。 (d) ( )
- ④ この歌、ある人のいはく、柿本人麻呂はまろがなり。 (e) ( ) (f) ( )

- ア 主格 イ 連体修飾格 ウ 同格 エ 体言の代用 オ 比喩
- カ 時・場所 キ 動作の対象 ク 順接の確定条件 ケ 逆接の確定条件

2 次の各文の空欄部に入る助詞を、傍訳を参考にして後から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ助詞を二度使ってはいけません。

- ① いっしか梅咲か  。 咲さいてほしい ( ) ② 玉の男皇子  生まれ給ひぬ。 ( ) 男の皇子までもが
  - ③ 我に今一度、声を  聞かせ給へ。 ( ) ④ いかで見  と思ひつつ、 ( ) 見たい
  - ⑤ 限りなく遠くも来にける  。 ( ) 来てしまったなあ
  - ⑥ 言問ことわぬ木  妹と背とありといふをただ独り子にあるが苦しさ ( ) 木でさえも
- ア だに イ すら ウ さへ エ なむ オ かな カ ばや

3 次の傍線部を口語訳しなさい。

- ① 「雨もぞ降る。御車は門の下に。御供の人はそこそこに」
- ② 中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、望みて預かれるなり。

①

②

4 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きけれ A、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひけり。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡繚を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。

- 問1 傍線部①②の助詞の意味用法を後から選び、記号で答えなさい。
- ア 主格 イ 連体修飾格 ウ 同格 エ 体言の代用 オ 比喩
- カ 動作の対象 キ 順接の確定条件 ク 逆接の確定条件
- 問2 空欄部Aに入る助詞として適当なものを後から選び、記号で答えなさい。
- ア とも イ ども ウ ば
- 問3 傍線部③「けり」を正しく活用させて書きなさい。
- 問4 傍線部④⑤⑥を口語訳しなさい。

問4			問1
⑥	⑤	④	①
			②
			問2
			問3

○ ヒント

1 (↓ p. 98 ~ 100・108 ~ 109)  
上に体言が補えれば格助詞、補えなければ接続助詞。

- 2 (↓ p. 113 ~ 114・118 ~ 125・126)  
① 他に対する希望。
- ② 添加。
- ③ 最低限度の希望。
- ④ 自己の希望。
- ⑤ 詠嘆。
- ⑥ 重いものを類推。

- 3 (↓ p. 121)  
① 「もぞ」は不安・危惧を表す。
- ② 「中垣」は家と家の間

にある垣根。「あれ」の下が読点で、文が続いていることに注意。

- 4 (↓ p. 98 ~ 128)
- 問1
- ① ② 「」の……連体形 + 格助詞「の」の形になっている。
- 問2
- A 「けれ」という已然形に接続している。
- 問3
- ③ 「なむ」の結び。
- 問4
- ④ 「で」は打消の接続助詞。
  - ⑤ 「神」は雷のこと。
  - ⑥ 「はや」は「早く」の意。「なむ」は終助詞。

敬語の種類と口語訳

主な敬語とその口語訳は、必ず暗記する。  
(特に、敬語そのものを別語に置き換える本動詞の訳。)

尊敬語	おはす(いらつしやる) のたまふ(おつしやる) 御覧す(御覧になる) 大殿籠る(お休みになる)など
謙譲語	参る(参上する) 聞こゆ(申し上げる) たまはる(いただく) など
丁寧語	侍り・候ふ(ございます) など

それ以外の敬語の訳し方  
尊敬語(…なさる・お…になる)  
謙譲語(…申し上げる・お…する)  
丁寧語(…です・…ます・…ございます)  
ただし、万能ではないので注意する。  
○お聞きになる  
×お見になる(見なさる)  
↓「御覧になる」などと訳す。

敬語動詞の基本形

敬語動詞も動詞だから、九種類の活用を間違えないこと。

1 次の文から敬語動詞を二つずつ抜き出し、本動詞ならA・補助動詞ならBと答えなさい。

① 大納言殿の参りたまへるなりけり。

② ここにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、

②	①

2 次の敬語は、(A尊敬語・B謙譲語)のいずれか。その本動詞の訳を後から選び、記号で答えなさい。

① まかる      ② 仕うまつる      ③ 聞こし召す      ④ のたまふ      ⑤ 給ふ(四段)

⑥ 召す      ⑦ まうづ      ⑧ 御覧す      ⑨ 聞こゆ      ⑩ 大殿籠る

ア お聞きになる      イ 御覧になる      ウ 参上する      エ お与えになる

オ 申し上げる      カ お休みになる      キ おつしやる      ク 退出する

ケ お呼びになる      コ お仕えする

⑩	⑦	④	①
		⑧	⑤
		⑨	⑥
			③

○ ヒント

1 (↓ p. 134 ~ 143)  
① 謙譲語と尊敬語が使われている。本動詞と補助動詞が一つずつ使われている。

2 (↓ p. 134 ~ 143)  
① 通常語は「出づ・去る」。  
② 通常語は「仕ふ・す」。  
③ 通常語は「聞く・食ふ・飲む」。  
④ ⑨ 通常語は「言ふ」。  
⑤ 通常語は「与ふ」。  
⑥ 通常語は「呼ぶ・着る・飲む・食ふ・乗る」。  
⑦ 通常語は「行く・来」。  
⑧ 通常語は「見る」。  
⑩ 通常語は「寝・寝ぬ」。

・侍り・いまそ(す)がり  
…ラ変動詞(基本形に注意)  
・おはす・御覧す…サ変動詞  
・まうづ・まかづ…タ行下二段  
・給ふ…四段尊敬・下二段謙譲  
多くは四段活用だが要注意。

敬語を含む口語訳

〔注意点〕 敬語そのものの訳だけでなく、直前の動詞や、下に続く助動詞なども正確に訳す。  
〔訳せないとき〕 いったん敬語を外して訳す。その後で敬語表現を加えてみる。

敬意の方向

・「誰から」については、地の文か会話文かで決まる。  
地の文↓筆者(語り手)から  
会話文↓発言者から  
・「誰へ」については、敬語の種類で決まる。  
尊敬語↓行動する人へ  
謙譲語↓行動を受ける人へ  
丁寧語↓地の文なら読者へ  
会話文なら聞き手へ

3 次の傍線部を、正しく口語訳しなさい。

① かぐや姫を養ひたてまつること二十余年になりぬ。

② 女御、例ならずあやしとおぼしけるに、…。

③ 子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。

④ 「(私ハ)一百九十歳にぞ、今年はなり侍りぬる。」

③	①
④	②

4 次の傍線部の敬語は、(A尊敬語・B謙譲語・C丁寧語)のいずれか。また、敬意の向き(誰から誰への敬意か)をそれぞれ答えなさい。

① 翁、皇子に申すやう、「いかなる所にかこの木はさぶらひけむ。」

② 天人、おそしと心もとながり給ひ、かぐや姫、「物知らぬこと、なのたまひぞ。」

とて、いみじく静かに、公に御文たてまつり給ふ。

②				①	
f	e	d	c	b	a

3 (↓ p. 134 ~ 143)  
① 「たてまつる」は補助動詞。  
③ 「えゝず」は不可能を表す。  
④ 敬語を外すと「なりぬる」。

←  
「ぬる」係り結びで連体形。Ⅱ完了の助動詞「ぬ」(なった)

←  
その訳に、「ます(丁寧語)」を加えてみる。

4 (↓ p. 134 ~ 143)  
① a b は本動詞。  
② c f は補助動詞。 d e は本動詞。

複数の用法をもつ敬語 (↓ p. 144 ~ 147)

給ふ(賜ふ)

・本動詞→すべて尊敬語

・補助動詞→四段活用なら尊敬語

下二段活用なら謙讓語

奉る

・本動詞→文脈で判断

①「与ふ」の謙讓語

②「食ふ」「飲む」の尊敬語

③「着る」の尊敬語

④「乗る」の尊敬語

・補助動詞→すべて謙讓語

参る

・(1)①「食ふ」「飲む」の尊敬語

②「着る」の尊敬語

②①「行く」「来」の謙讓語

②「与ふ」の謙讓語

・(3)①「行く」「来」の丁寧語

侍り・候ふ

・本動詞→文脈で判断

①「仕ふ」「あり」の謙讓語

②「あり」の丁寧語

・補助動詞→すべて丁寧語

1 次の傍線部の複数の用法をもつ敬語は、(A 尊敬語・B 謙讓語・C 丁寧語)のいずれか。また、誰から誰への敬意か、それぞれ答えなさい。

①「母君ガ命婦ニ」<sup>a</sup>「うちうちに思ひ給ふ<sup>b</sup>るさまを奏し給へ」<sup>c</sup>

(私が心の中で)

(桐壺帝に)

②「大臣ハ源氏ヲ」わが御車に<sup>c</sup>乗せ奉り給ひて、みづからは、引き入<sup>d</sup>りて奉れり。

引きさがつて

③「具氏ガ大納言入道ニ」<sup>e</sup>「本より深き道は知り侍らず。そぞろ<sup>f</sup>ことを尋ね奉らむと定め申しつ。」と申されければ、…

とりとめのないことを

④九月二十日の頃、ある人に誘は<sup>g</sup>れ奉りて、明くるまで月見歩<sup>h</sup>くこと侍りしに、

歩き回った

○ヒント

1 (↓ p. 144 ~ 147)

① a 「給ふる」は四段活用ではない。

② d は本動詞。

③ e f ともに補助動詞。

④ h は本動詞。

敬語の注意すべき用法 (↓ p. 148 ~ 150)

1 二方面への敬語

「動作の受け手」と「動作の主語」の両方に敬意を払う表現。「(動詞+)

謙語+尊敬語」となる。

・「見

謙讓||動作の受け手に対する敬意

・「見 給ふ。 尊敬||動作の主語に対する敬意

2 最高敬語(二重敬語)

特別に高い敬意を表すもの。「尊敬語+尊敬語」の形をとる。

・「見させ 給ふ。(助動詞+補助動詞)

・「仰せらる。(動詞+助動詞)

3 絶対敬語

動作の受け手が最高階級の人である場合にだけ用いられる謙讓語で、次の二つがある。

・奏す(天皇・上皇・法皇に)申し上げる

・啓す(皇后・中宮・皇太子に)申し上げる

4 自敬表現(自尊敬語)

自分の動作に尊敬語を用いたり、相手の動作に謙讓語を用いたりして、高貴な人が自分を高める表現。

・見て参れ。…参る人を低め、自分を高める表現。

2 次の□内の部分には二つの敬語が使われている。①②のいずれが、二方面への敬語か。また絶対敬語があれば、その語を答えなさい。さらに□内のa・bそれぞれの敬意の対象は誰か、答えなさい。

①御返しうけたまはりて、御輿のもとにて<sup>a</sup>奏し<sup>b</sup>給ふ。ほど、いふもおろかなり。

(女院のお返事)

(齊信は天皇の)

言いつくせない

②「花山院二道兼公ガ」かくと案内申して必ず<sup>a</sup>参り<sup>b</sup>侍らむ。」と申し給ひければ、…

(出家する)事情を(私の父に)申し上げて

	①	a
②	a	
	b	b

3 次の傍線部の敬語について、敬語の種類を答えなさい。また、どのような敬語表現であるか、後から選び記号で答えなさい。

①御前に参りて、ありつるやう啓すれば、

②「(私は)翁に冠をなか賜はせざらむ」

③魂をとどめたる心地してなむ、帰らせ給ひける。

A 最高敬語    イ 絶対敬語    ウ 自尊表現

③	①
	②

2 (↓ p. 148 ~ 150)

①「奏し」は天皇・上皇に対して「申し上げる」という意味。

②「参り」とは、父親に事情を告げた後に、花山天皇のもとに戻って来ることを意味する。

3 (↓ p. 149 ~ 150)

①「啓すれ」は皇太子・皇后に「申し上げる」という意味。

②これは帝の翁に対する発言。「賜はせ」は「お与えになる」という意味。







句切れの見分け方 (⇩ p. 154 ~ 155)  
次のような部分に注目する。  
(1) 「な」「かな」などの終助詞  
(2) 係り結び  
(3) 活用語の終止形や命令形  
文法的に切れるところが、意味的にも切れるところである。また、句切れは常にあるわけではない(句切れなしもある)。

掛詞の二つの意味 (⇩ p. 156 ~ 158)

掛詞が指定されている場合は、  
・掛詞の上からの続き方  
・掛詞の下への続き方  
の両者から意味を考える。

掛詞の見つけ方 (⇩ p. 156 ~ 158)

どこが掛詞かは少し難しいが、パターンがある場合が多い。よく使われる主な掛詞(⇩テキスト p. 158)を暗記しておきたい。  
自然に関することと人間に関することを掛けることも多い。また、次のような例もあるので注意が必要である。  
・言葉の一部が掛けられている場合  
「待つ」と「松虫」  
・清音と濁音が掛けられている場合  
「あらし」と「あらい」

枕詞の決め方 (⇩ p. 159)

特定の語にかかるわけだから、下の語から考えればよい。(ただし、下の語が掛詞になっている場合は、注意すること。)  
枕詞は、上代に多く、それ以降は急に使われなくなる。

序詞の見つけ方 (⇩ p. 160 ~ 161)

序詞は、意味や音によって中心部分につながる比喩表現だから、歌の中心部分はどこかを考える。その歌の中心をたどっている部分が序詞になる。

意味的には枕詞と共通するが、多くは一回限りであり、その和歌独自の用法である点が、枕詞と異なる。だから公式のようなものはなく、右のことを手がかりに考える。

縁語の見つけ方 (⇩ p. 162 ~ 163)

縁語は、「意味の連想」だから、  
(1) つながりそうな語を探す。  
(2) 掛詞を調べる。(併用されることが多いため。)

その他の修辞法 (⇩ p. 164 ~ 165)

・本歌取り…古歌の語句や表現の一部を取り入れて詠む。  
・折句…言葉を各句の頭に詠み込む。  
・体言止め…第五句を体言で終える。

1 次の和歌について、句切れのある場合は何句切れかを答えなさい。ない場合は、解答欄に×を書きなさい。

- ① 見渡せば 花も紅葉も なかりけり 浦のとまや秋の夕暮れ  
② 心のみ 野にも山にも あくがれて 道こそなけれ 雪のあけぼの  
③ 旅人の 袖吹き返す 秋風に 夕日寂しき 山のかけはし  
思いこがれているが(実際は)歩く道はない  
架け橋が美しいことよ

①	②	③
---	---	---

2 次の①②の和歌の傍線部は掛詞である。また、③④の和歌には掛詞が一つずつある。何と何の意味が掛けてあるか。③④は抜き出した上で、それぞれを漢字交じりで答えなさい。

- ① 嘆きつつ あかしの浦に 朝霧の 立つやと人を 思ひやるかな  
立つと一人で立っているのかと  
② 照る月を 弓張りとしも いふことは 山辺をさして いればなりけり  
「弓張り(月)」というのは  
③ 今日別れ 明日はあふみと 思へども 夜やふけぬらむ 袖の露けき  
露つぼくぬれているよ  
④ 山田守る 案山子の身こそ あはれなれ あき果てぬれば 訪ふ人もなし  
(注) 案山子Ⅱ かかし。田畑を荒らす鳥獣を防ぐために立てる人形。

③	①
	②
	④

3 次の空欄に入れるべき枕詞を、後のア・エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 降る雪は かつぞ消ぬらし (山のたぎつ瀬 音まさるなり)  
一方ではすぐに解けて消えてしまつたし 激しく流れる瀬の  
② 待つ人は 来ぬと聞けども (年のみ越ゆる 逢坂の関)  
③ 家にあれば 筈に盛る飯を (旅にしあれば 椎の葉に盛る)  
ア あしびきの イ あらたまの ウ しきしまの エ くさまくら

4 次の和歌から序詞の部分を抜き出し、それが導いている語句を示しなさい。また、その序詞はア比喩的な意味でつながる用法、イ音の連想でつながる用法のどちらか。ア・イの記号で答えなさい。

- 例 駿河なる 宇津の山辺の うつつにも 夢にも人に 会はぬなりけり  
① 浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど あまりてなどか 人の恋しき  
あさぢふ しのはら  
② 風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ くだけて物を 思ふころかな  
あざみ 風が激しいので 忍びきれずに、どうしてこんなに

例	序詞	語	用法	序詞	語	用法
駿河ゝ山辺の	うつつ	イ	①			
			②			

5 次の和歌から傍線部「涙川」の縁語を三つ指摘しなさい。

涙川 そことも知らず つらき瀬を 行きかへりつつ ながれ来にけり  
苦しい流れを 行ったり帰ったりして

--	--	--

○ ヒント  
① 終助詞、② 係り結び、  
③ 終止形や命令形に注目する。

2 (⇩ p. 156 ~ 158)

① 地名が掛詞になることが多い。  
② のように、指定された掛詞までにすでに二つの意味が示されている場合②は「月」と「弓張り」は、その両者について考える。  
④ 「案山子」が必要な季節はいつか。

3 (⇩ p. 159)

① 「山」、② 「年」、③ 「旅」にかかる枕詞。

4 (⇩ p. 160 ~ 161 ~ 163)

① 「しのはら」と「しのぶれど」に注目する。  
② 「波」は「岩」を打った後にどうなるか。序詞と導く語の間に、ほかの言葉が入る場合もあるので注意しよう。

5 (⇩ p. 162 ~ 163)

「涙川」とは、涙でなく「川」だから、「川」(水の流れ)につながり、そのような意味の語を探すこと。「そこ」「ながれ」は掛詞。

1 **ぬ・ね** (⇩ p. 173)  
未然形 +ぬ・ね ↓打消「ず」  
連用形 +ぬ・ね ↓完了「ぬ」  
\* 未然形・連用形が同形の場合は、直後の語・係り結びで判断。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ぬ	ず	ず	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
ね	ず	ず	ね	ね	ね	ね

2 **る・れ** (⇩ p. 175)

ア 段の音 +る・れ

↓自発・可能・受身・尊敬「る」

\* 四段・ナ変・ラ変の未然形につく。

工段の音 +る・れ ↓完了「り」

\* 四段の命令形・サ変の未然形につく。

3 **なり** (⇩ p. 172)

連体形 +なり ↓断定(存在)

体言 \* 助詞や副詞にもつく。

終止形 +なり ↓伝聞推定

ラ変型の連体形 \* 聴覚による推定。

―なり ↓形容動詞の活用語尾

―に +なり ↓四段動詞「なる」

―と \* 「なる」と訳せる。

4 **けれ** (⇩ p. 167)

- 1 次の傍線部 a～e の適切な説明を、それぞれ語の下から選び記号で答えなさい。(一部を除き、本書収録の例文を用いています。口語訳などは、そのページを参照ください。)
- 1 **ぬ・ね** ア 打消の助動詞 イ 完了の助動詞  
① 一人知らぬ世界に漂ひて、年久しくなりぬ。 ( )  
② とりたてて書くべきことならねど、 (⇩ p. 71) ( )  
③ この思ひおきつる宿世違はば、海に入りぬ。 ( )  
心に決めておいた宿命と
- 2 **る・れ** ア 自発・可能・受身・尊敬の助動詞 イ 完了の助動詞  
① 大納言殿の参りたまへるなりけり。 (⇩ p. 152) ( )  
② 御前にてあらそはるべし。 (⇩ p. 80) ( )  
③ 涙のこぼるるに、目も見えず、ものも言はれず。 (⇩ p. 60) ( )  
④ いと思ひの外なる人の言へれば、人々あやしがる。 ( )  
詠んだので
- 3 **なり・なる** ア 断定(存在)の助動詞 イ 伝聞推定の助動詞  
ウ 形容動詞の活用語尾 エ 動詞  
① 身もくたびれ、心も静かならず。 (⇩ p. 38) ( )  
② みな人は花の衣になりぬなり。 (⇩ p. 89) ( )  
③ 春日なる三笠の山にいでし月かも (⇩ p. 86) ( )

1 (⇩ p. 173)  
直前の活用形で判断する。

2 (⇩ p. 175)  
直前の語の音(接続)で判断する。

3 (⇩ p. 172)  
直前の品詞・活用形で判断する。

4 (⇩ p. 167)  
上の語から判断する。

5 (⇩ p. 171)  
接続(直前の活用形)と意味で判断する。

6 (⇩ p. 172 ~ 173)  
直前の語や活用形、連体形ならば下に体言が補えるかで判断する。

4 **けれ** ア 過去の助動詞 イ 動詞の活用語尾 +完了の助動詞

ウ 形容詞の活用語尾 エ 推量の助動詞の一部

- ① ころろ劣りせらるる本性みえんこそ口をしかるべけれ。 (⇩ p. 78) ( )  
② いと苦しければ、山寺なる石井によりて (⇩ p. 44) ( )  
③ 咲かざりし花も咲けれど ( )  
④ 誠にさにこそ候ひけれ。 (⇩ p. 93) ( )

5 **なむ** ア 終助詞 イ 強意の助動詞 +推量の助動詞

ウ 係助詞 エ ナ変動詞の活用語尾 +推量の助動詞の一部

- ① 今ひとたびのみゆきまたなむ (⇩ p. 125) ( )  
② 「……」と言ひてありなむ。 (⇩ p. 78) ( )  
③ 足の向きたらむ方へいなむず。 ( )  
④ その人、かたちよりは心なむまさりたりける。 (⇩ p. 118) ( )

6 **に** ア 完了の助動詞 イ 断定の助動詞 ウ 格助詞

エ 接続助詞 オ 形容動詞の活用語尾

- ① いとはいはけなくをかしげにておはす。 (⇩ p. 39) ( )  
② 生死の到来、ただ今にもやあらむ。 (⇩ p. 93) ( )  
③ 行き行きて、駿河の国に至りぬ。 (⇩ p. 100) ( )  
④ 涙落つとも覚えぬに、枕浮くばかりになりけり。 (⇩ p. 108) ( )

連用形 +けれ ↓過去「けり」  
―け +れ ↓四段動詞の語尾 +完了「り」  
―けれ ↓形容詞型活用の一部

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
り	ら	り	り	る	れ	れ
けり	(け)ら	り	けり	ける	けれ	けれ
べし	(べ)く	べく	べし	べき	べけれ	べけれ

5 **なむ** (⇩ p. 171)  
未然形 +なむ ↓希望の終助詞 (…てほしい)  
連用形 +なむ ↓む(きつと…)  
↓強意の助動詞「ぬ」の未然形/推量の助動詞「む」  
種々の語 +なむ ↓強意の係助詞  
\* 訳を省ける。  
死な(未然) +む ↓ナ変動詞の語尾 +推量の助動詞「む」

6 **に** (⇩ p. 172 ~ 173)  
連用形 +に ↓完了「ぬ」の連用形  
\* 「に +き・けり」の形が多い。  
連体形・体言 +に (…である)  
↓断定「なり」の連用形  
\* 「に +助詞 +あり」の形が多い。  
連体形・体言 +に ↓格助詞  
\* 連体形の下に体言が補える。  
連体形 +に ↓接続助詞  
―に ↓形容動詞の連用形語尾

**1 が** (⇨ p. 167)  
 体言 + が ↓ **格助詞**  
 連体形 + が ↓ **格助詞**か**接続助詞**  
 ・ **格助詞**⇨連体形の下に体言及び体言代用の「の」が補える。  
 ・ **接続助詞**⇨下に体言が補えず、「…けれど…ところ」などの意。

**2 し** (⇨ p. 168)

連用形 + し + 体言 ↓ **過去「き」の連体形**  
 ・ 力変・サ変は、未然形にも接続。直後の語で活用形 (**連体形**) を確認する。  
 「し」を省ける ↓ **副助詞**  
 「し」に「する」の意 ↓ **サ変動詞**  
 ・ 活用形 (**連用形**) を確認する。

**3 らむ** (⇨ p. 174 ~ 175)

ウ段の音 + らむ ↓ **現在推量「らむ」**  
 工段の音 + ら / む ↓ **完了「り」未然形／推量「む」**  
 ーら + む ↓ **ラ変動詞・形容動詞 + 推量「む」**

**4 して** (⇨ p. 168)

体言・連体形 + して ↓ **格助詞**  
 連用形 + して ↓ **接続助詞**  
 ・ 「く」「に」「と」「ず」に接続。「し」

**1** 次の傍線部 a ~ d の適切な品詞(の一部もあり)を、それぞれ選び記号で答えなさい。(一部を除き、本書収録の例文を用いています。口語訳などは、そのページを参照ください。)

**1 が** ア 格助詞 イ 接続助詞

① 女二人ありけるが、姉は人の妻にてありける。(⇨ p. 108)  
 ② 雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。

**2 し** ア サ変動詞 イ 過去の助動詞 ウ 副助詞

① 深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け  
 ② 学問して因果のことわりをも知り、  
 ③ 君がため惜しからざりしいのちさへ

**3 らむ** ア 現在(原因)推量の助動詞

イ 完了・存続の助動詞 + 推量の助動詞  
 ウ ラ変動詞の活用語尾 + 推量の助動詞  
 エ 形容動詞の活用語尾の一部 + 推量の助動詞

① 南海の浜に吹きよせられたるにやあらむ。  
 ② しづ心なく花の散るらむ  
 ③ このわたりの心知れらむ者を召して、問へ。  
 ④ 少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。

**1** (⇨ p. 167)  
 上の語が体言か連体形か、連体形ならば下に体言が補えるかで判断する。

**2** (⇨ p. 168)  
 活用形と意味で判断する。

**3** (⇨ p. 174 ~ 175)  
 直前の語の音(接続)や「ら」の上の語から判断する。

**4** (⇨ p. 168)  
 接続(直前の語)と意味で判断する。

**5** (⇨ p. 169)  
 意味と接続(直前の活用形)で判断する。

**6** (⇨ p. 173)  
 断定か格助詞かは意味で判断する。

**7** (⇨ p. 175)  
 上の語が体言か連体形か、連体形ならば下に体言が補えるかで判断する。

**4 して** ア 格助詞 イ 接続助詞

ウ サ行四段動詞の活用語尾 + 接続助詞

① 宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、  
 ② 友とする人ひとりふたりして行きけり。  
 ③ 三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。

**5 せ** ア サ変動詞 イ 使役・尊敬の助動詞 ウ 過去の助動詞

① などかうは泣かせ給ふぞ。  
 ② 〈娘ハ〉上の宮仕へ、時々せしかば、〈源氏ハ〉見給ふ折もありしを、  
 ③ 世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

**6 にて** ア 格助詞 イ 形容動詞の活用語尾 + 接続助詞

ウ 断定の助動詞 + 接続助詞  
 ① 女二人ありけるが、姉は人の妻にてありける。  
 ② 光みちて清らにてゐたる人あり。  
 ③ 御馬にて二条の院へおはしまさむ。

**7 を** ア 格助詞 イ 接続助詞 ウ 間投助詞

① 人にありせば太刀佩けましを衣着せましを  
 ② 梓弓春の山辺を越えくれば  
 ③ 二つなきものと思ひしを水底に山の端ならで出づる月影



○ 助動詞の意味・活用・接続を覚えよう。 ……コピーをして、( )や活用表の空欄に適切な語を入れなさい。

基本形		意味		未然形		連用形		終止形		連体形		已然形		命令形		活用の型	
ぬ	つ	けり	き	まほし	じ	まし	（んず） （むず）	（んむ） （んむ）	ず	しむ	さす	す	らる	る			
（ ）	（ ） 、 （ ）	（ ） 、 （ ）	（ ） 	（ ） 	（ ） 、 （ ） 	（ ） 、 ためらいの意志 実現不可能な希望、 推量	（ ） 仮定・ （ ） 	（ ） 適当・勧誘	（ ） 	（ ） （ず）	（ ） 	（ ） 	（ ） 	（ ） 、 （ ） 	（ ） 	（ ） 	（ ） 、 （ ） 
		（けら）	（せ）	（まほしく）	○	ましか （ませ）	○	（ま）									
		○	○		○	○	○	○	○								
				○					○								
				○													
		○	○	○	○	○	○	○	○								
ナ変型	下二段型	ラ変型	特殊型	形容詞型 （シク活用）	不変化型	特殊型	サ変型	四段型	ラ変型	特殊型	下二段型				活用		
			（ ） 形、カ変・サ変には未然形にも	（ ） 形						（ ） 形				（ ） 形	右以外の（ ） 形	四段・ラ変・ナ変の（ ） 形	（ ） 形

り	ごとし	たり	なり	なり	まじ	べし	らし	めり	(らん) らむ	たし	(けん) けむ	たり
( )	( )	( )	断定、( )	( )	禁止、( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
	(ごとく)			○	(まじく)		○	○	○	(たく)	○	
				(なり)			○	(めり)	○		○	
					○	○				○		
							(らしき) らし					
	○				○	○				○		
	○			○	○	○	○	○	○	○	○	
ラ変型	形容詞型 (ク活用)	(タリ活用)	形容動詞型 (ナリ活用)	ラ変型	形容詞型 (シク活用)	形容詞型 (ク活用)	不変化型	ラ変型	四段型	形容詞型 (ク活用)	四段型	ラ変型
サ変の( )	格助詞「の・が」、体言、( )形	体言	体言、( )形	( )形				( )形				( )形

\* 接続による分類にしたがっています

……コピーをして、〔 〕や活用表の空欄に適切な語を入れなさい。

形容動詞		形容詞		動 詞											活用の種類								
				変格活用				正格活用															
タリ活用	ナリ活用	シク活用	ク活用	㊦力行変格活用	㊧サ行変格活用	㊨ナ行変格活用	㊩ラ行変格活用	㊪下一段活用	㊫上一段活用	㊬下二段活用		㊭上二段活用		㊮四段活用	行 基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
									カ														
	静かなり		なし		おはす	死ぬ	あり		着る		寄す		落つ		吹く								例語 基本形の空欄に例語を入れて活用表を埋めなさい) 吹く・急ぐ・差す・打つ・思ふ・飛ぶ・読む・散る(など多数) *「＋ズ」で、ア段の音につけば↓四段
				(	おは			(	(														
		(	(																				
		○	○																				
		○	○																				
		○	○																				
索々たり・堂々たり・荒涼たり・悠々たり *連用形には二つの活用	静かなり・清らなり・のどかなり・あはれなり *連用形には二つの活用	久し・恋し・親し・美し・ゆかし・すさまじ *左側は補助活用(カリ活用)	なし・清し・浅し・若し・らうたし・はかなし *左側は補助活用(カリ活用)	(1語のみ)	「 <u>        </u> 」・おはす(2語のみだが、複合動詞になる)	死ぬ・「 <u>        </u> 」 (去ぬ)(2語のみ)	あり・居り・「 <u>        </u> 」・いまそ(す)がり(4語のみ)	*「 <u>        </u> 」は、語幹と語尾の区別がない。(1語のみ)	着る・似る・干る・見る・鑄る・居る(など10語)	得・受く・投ぐ・寄す・混ず・捨つ・出づ・尋ぬ・答ふ・比ぶ・求む・越ゆ・流る・植う(など多数) *「＋ズ」で、エ段の音につけば↓下二段		起く・過ぐ・落つ・恥づ・恋ふ・帶ぶ・恨む・老ゆ・下る(など多数) *「＋ズ」で、イ段の音につけば↓上二段		吹く・急ぐ・差す・打つ・思ふ・飛ぶ・読む・散る(など多数) *「＋ズ」で、ア段の音につけば↓四段									